

大宰府の成立過程



I はじめに

「魏志倭人伝」に見える一大率

II 大宰府の前身

- (1) 那津官家 比惠・那珂遺跡
- (2) 筑紫大宰
- (3) 笠志惣領・筑紫惣領

III 大宰府都城の成立

- (1) 羅城・水城と山城
- (2) 条坊制・官道
- (3) 政庁・朝堂院形式
- (4) 学校院
- (5) 藏司
- (6) 筑紫館 大宰府鴻臚館
- (7) 寺院 觀世音寺 国分寺（僧寺・尼寺） 塔原廃寺など
- (8) 神社 宝満山と竈門神社



九州歴史資料館 1978『蘇る遠の朝廷 大宰府展』

IV 大宰府関連の遺跡

- (1) 怡土城
- (2) 元岡・桑原遺跡群 鉄・鉄器・瓦生産
元岡・斜ヶ浦・老司瓦窯跡
- (3) 海の中道遺跡 塩生産
- (4) 徳永・今宿五郎江遺跡 主船司関係

V おわりに

九州三島（二島）の官衙群 国・評（郡）・里（郷）の遺跡
長安城・渤海京・新羅京と平城京・大宰府

【お知らせ】

次回の館長講座は 1 月 13(日)13:30~(2 時間程度) 講義室にて開催いたします。

表 大宰・総領関係記事一覧

年月日	表記	人名	記事	出典
推古17(609). 4. 4	筑紫大宰		百濟僧道欣らが肥後國葦北津に泊ることを奏上。	日本書紀
皇極 2(643). 4.21	筑紫大宰		百濟王の子翫岐が調使とともに来朝することを馳駅奏上。	日本書紀
皇極 2(643). 6.13	筑紫大宰		高麗が遣使来朝することを馳駅奏上。	日本書紀
大化 5(649). 3	筑紫大宰帥	蘇我日向	世人、隱流かという。	日本書紀
大化 5(649).	惣領	高向大夫	中臣某ら、惣領に要請して神郡を別置。己酉年。	常陸國風土記
白雉 4(653).	惣領	高向大夫	物部河内ら、惣領に要請して信太郡を設置。癸丑年。	常陸國風土記 逸文
白雉 4(653).	惣領	高向大夫、中臣幡織田大夫	茨城・那珂国造、惣領に要請して郡家を別置。癸丑年。	常陸國風土記
白雉 4(653).	惣領	高向大夫	多珂国造ら、惣領に要請して多珂・石城の二郡を設置	常陸國風土記
孝德朝	(惣領)		高向臣・中臣幡織田連らを派遣して坂より東の国を惣領す。	常陸國風土記
天智 3(664). 9	筑紫大宰		津守吉祥ら、勅旨を筑紫大宰辞と称して、郭務悰らに宣告。	善隣國寶記
天智 3(664). 12	日本鎮西 筑紫大將軍		郭務悰帰国。日本鎮西筑紫大將軍牒を授く。	善隣國寶記
天智 6(667). 11. 9	筑紫都督府		唐の百濟鎮将、遣唐使を送致。	日本書紀
天智 7(668). 7	筑紫率	栗前王	任命。	日本書紀
天智 8(669). 1. 9	筑紫率	蘇我赤兄	任命。	日本書紀
天智 10(671). 6	筑紫率	栗隈王	任命。	日本書紀
天智 10(671). 11. 10	筑紫大宰府		対馬國司、郭務悰らの来航を言上。	日本書紀
天武 1(672). 6.26	筑紫大宰	栗隈王	近江朝廷の興兵要請を拒否。	日本書紀
天武 2(673). 8.25	大宰		耽羅使人に詔を伝達。	日本書紀
天武 5(676). 9.12	筑紫大宰	屋垣王	罪あって土佐に配流。三位。	日本書紀
天武 6(677). 11. 1	筑紫大宰		赤鳥を献上。大宰府諸司の人に賜禄。	日本書紀
天武 8(679). 3. 9	吉備大宰	石川王	病により、吉備にて死没。	日本書紀
天武 11(682). 4.21	筑紫大宰	丹比島	大鐘を献上。	日本書紀
天武 11(682). 8.13	筑紫大宰		三足の雀有るを言上。	日本書紀
天武 12(683). 1. 2	筑紫大宰	丹比島	三足の雀を献上。	日本書紀
天武 14(685). 11. 2	周芳總令		周芳總令の所に儲用の鉄一万斤を送付する	日本書紀
天武 14(685). 11. 2	筑紫大宰		儲用の物として糸・布・鉄・箭竹等を要請。筑紫に送下。	日本書紀
持統即位前記閏12	筑紫大宰		高麗・百濟・新羅の百姓、僧尼を献上。	日本書紀
持統 1(687). 4.10	筑紫大宰		投化の新羅僧尼・百姓を献上。	日本書紀
持統 1(687). 9.23	筑紫大宰		天皇の死没を新羅使に宣告。	日本書紀
持統 2(688). 2. 2	筑紫大宰		新羅の調賦・別獻物等を献上。	日本書紀
持統 3(689). 1. 9	筑紫大宰	粟田真人	隼人・布・牛皮・鹿皮を献上。	日本書紀
持統 3(689). 6. 1	筑紫大宰		筑紫大宰に衣裳を賜与。	日本書紀
持統 3(689). 6.20	筑紫大宰	粟田真人	筑紫大宰に詔して、学問僧が新羅師友に送る綿を賜与。	日本書紀
持統 3(689). 8.21	伊予總領	田中法麻呂	伊予總領に詔して、讃吉國御城郡捕獲の白燕を放養させる。	日本書紀
持統 3(689). 閏8.27	筑紫大宰帥	河内王	任命。淨広肆。	日本書紀
持統 4(690). 7. 6	大宰		大宰・國司、皆遷任。	日本書紀
持統 4(690). 10.15	筑紫大宰	河内王	使者を派遣し、筑紫大宰に詔して新羅送使の饗應につき指示。	日本書紀
持統 5(691). 1.14	筑紫大宰府典	筑紫益	典押任29年、清白・忠誠を賞し食封・布・稻等を賜与。	日本書紀
持統 6(692). 閏5.15	筑紫大宰率	河内王	筑紫大宰率に詔して、大隅・阿多への仏教布教を命令。	日本書紀
持統 8(694). 4. 5	筑紫大宰率	河内王	淨大肆を追贈、また賜物を賜与。	日本書紀
持統 8(694). 9.22	筑紫大宰率	三野王	任命。淨広肆。	日本書紀
文武 2(698). 5.25	大宰府		大野・基肄・鞠智の三城を繕治。	統日本紀
文武 3(699). 12. 4	大宰府		三野・稻積の二城を修す。	統日本紀
文武 4(700). 6. 3	竺志惣領		薩末比壳ら、覓国使を剽劫、竺志惣領に勅して決罰。	統日本紀
文武 4(700). 10.15	筑紫惣領	石上麻呂	任命、直大壹。直広參小野毛野を大式に任命。	統日本紀
文武 4(700). 10.15	周防惣領	波多牟後間	任命、直広參。	統日本紀
文武 4(700). 10.15	吉備惣領	上毛野小足	任命、直広參。	統日本紀
年月未詳	未詳	石川王	都可村を広山里と改称	播磨國風土記

重松敏彦, 2008 「大宰府成立の諸問題」 大宰府史跡整備調査40周年記念講演会 配布資料

『日本書紀』宣化天皇二年十月壬辰（一日）条

二年冬十月壬辰朔。天皇以新羅寇於任那。詔大伴金村大連。遣其子磐與狹手彥以助任那。是時。磐留筑紫執其國政以備三韓。狹手彥往鎮任那。加救百濟。

〔読み下し〕天皇、新羅の任那に寇するを以て、大伴金村大連に詔して、その子磐と狹手彥とを遣わして任那を助けしむ。磐は、筑紫に留まりて、その国政を執り三韓に備う。狹手彥は往きて任那を鎮め、加、百濟を救う。

○筑紫大宰・筑紫總領関係記事

〔9〕『日本書紀』推古天皇十七年（六〇九）四月庚子（四日）条（筑紫大宰の初見）

十七年夏四月丁酉朔庚子。筑紫大宰奏上言。百濟僧道欣。惠彌爲首一十人。俗人七十五人。泊于肥後國葦北津。是時。遣難波吉士德摩呂。船史龍以問之曰。何來也。對曰。百濟王命以遣於吳國。其國有亂不入。更返於本鄉。忽逢暴風漂蕩海中。然有大幸而泊于聖帝之邊境。以歡喜。

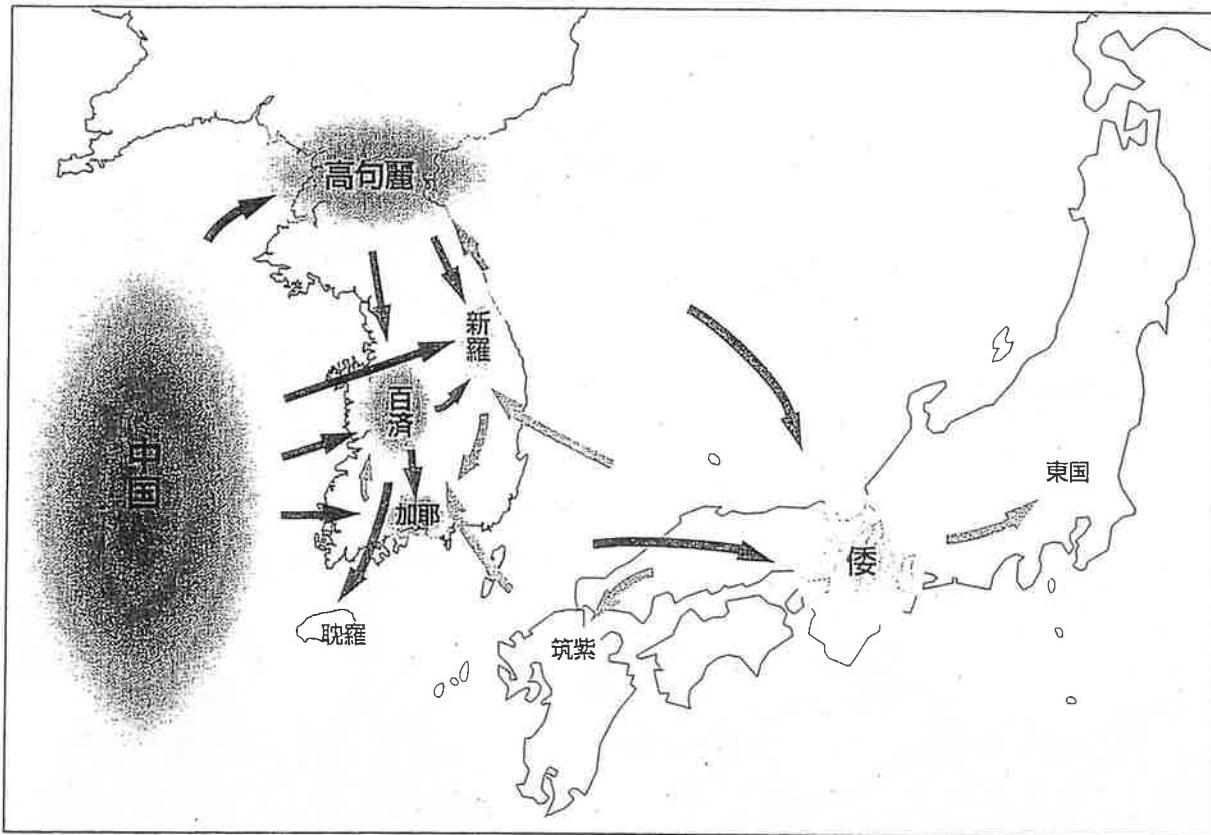
〔読み下し〕筑紫大宰奏上していわく、「百濟の僧道欣・惠彌、首として一十人、俗七十五人、肥後國葦北津に泊れり。」と。是の時、難波吉士徳摩呂・船史龍を遣わして以て問わしめていわく「何か來し。」と。對えていわく「百濟王、命じて以て吳國に遣わす。其の國、亂有りて入ることを得ず。更に本郷に返る。忽に暴風に逢いて海中に漂蕩す。然るに大いなる幸有りて聖帝の邊境に泊れり。以て歡喜す。」と。

○「那津官家」関連記事

『日本書紀』宣化天皇元年五月辛丑（一日）条（原漢文）

夏五月辛丑朔。詔曰。（A）食者天下之本也。黃金萬貫不可療飢。白玉千箱何能救冷。夫筑紫國者遐迩之所朝屬。去來之所關門。是以海表之國候海水以來賓。望天雲而奉貢。自胎中之帝于朕身。收藏穀稼。蓄積儲糧。謹設凶年。厚饗良客。安國之方。更無過此。（B）故朕遣阿蘇仍君。（未詳也。）加運河內國茨田郡屯倉之穀。蘇我大臣稻目宿禰。宜遣尾張連運尾張國屯倉之穀。物部大連熊鹿火宜遣新家連運新家屯倉之穀。阿倍臣宜遣伊賀臣連伊賀國屯倉之穀。修造官家那津之口。（C）又其筑紫肥豐三國屯倉。散在縣隔。運輸遙阻。儻如須要。難以備卒。亦宜課諸郡分移。聚建那津之口。以備非常。永爲民命。早下郡縣令知朕心。

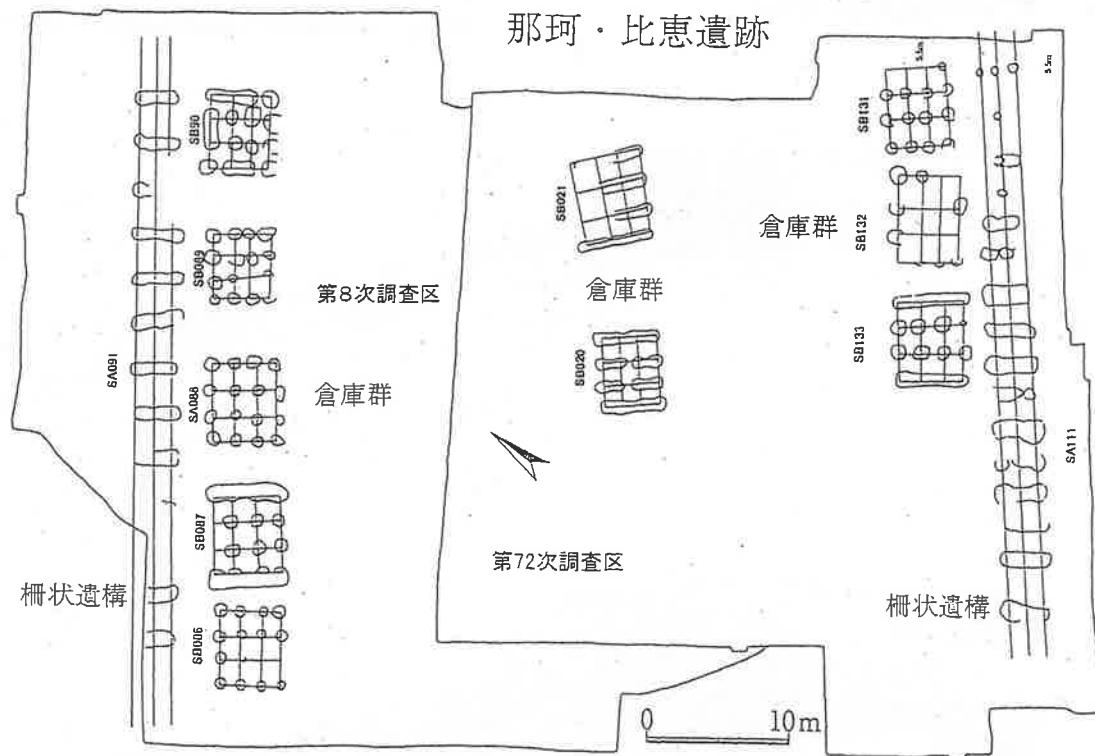
〔読み下し〕詔していわく、「（A）食は天下の本なり。黄金萬貫ありとも、飢を療すべからず。白玉千箱ありとも、何ぞ能く冷を救わん。それ筑紫國は遐く近く朝で届るところ、去來の關門とするところなり。是を以て海表の國は、海水を候して以て來賓し、天雲を望みて奉貢す。胎中之帝より朕が身にるまでに、穀稼を收藏し、儲糧を蓄積す。遥かに凶年に設け、厚く良客を饗す。國を安んずるの方、更に此に過るは無し。（B）故、朕、阿蘇仍君（未だ詳ならず）を遣わして、加、河内國茨田郡の屯倉の穀を運ばしむ。蘇我大臣稻目宿禰は、宜しく尾張連を遣わして尾張國の屯倉の穀を運ばしむべし。物部大連熊鹿火は、宜しく新家連を遣わして新家屯倉の穀を運ばしむべし。阿倍臣は、宜しく伊賀臣を遣わして伊賀國の屯倉の穀を運ばしむべし。官家を那津の口に修造せよ。（C）又其の筑紫・肥・豊三國の屯倉、散じて縣隔に在り。運び輸すに、遙に阻れり。儻如し、須要いんとせば、以て卒に備え難し。亦宜しく諸郡に課して分け移して、那津の口に聚め建てて、以て非常に備えて、永く民の命と爲すべし。早く郡縣に下して朕が心を知らしめよ。」と。



各王権の相互関係

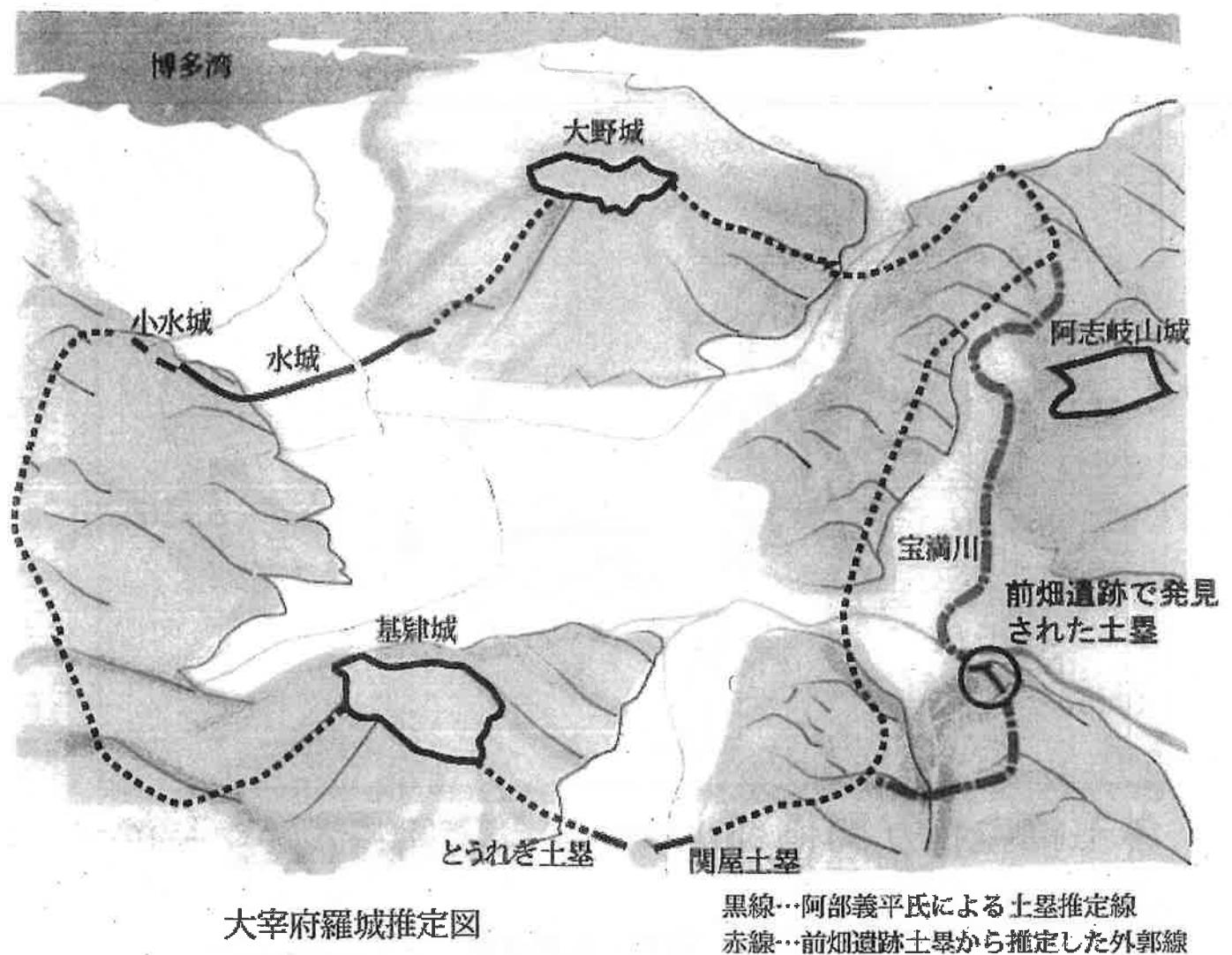
国立歴史民俗博物館

平成22年度人間文化研究機構連携展示
アジアの境界を越えて 2010



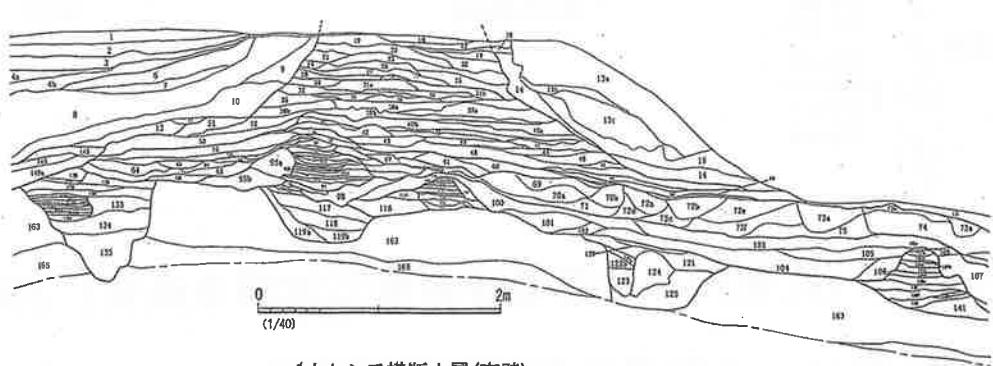
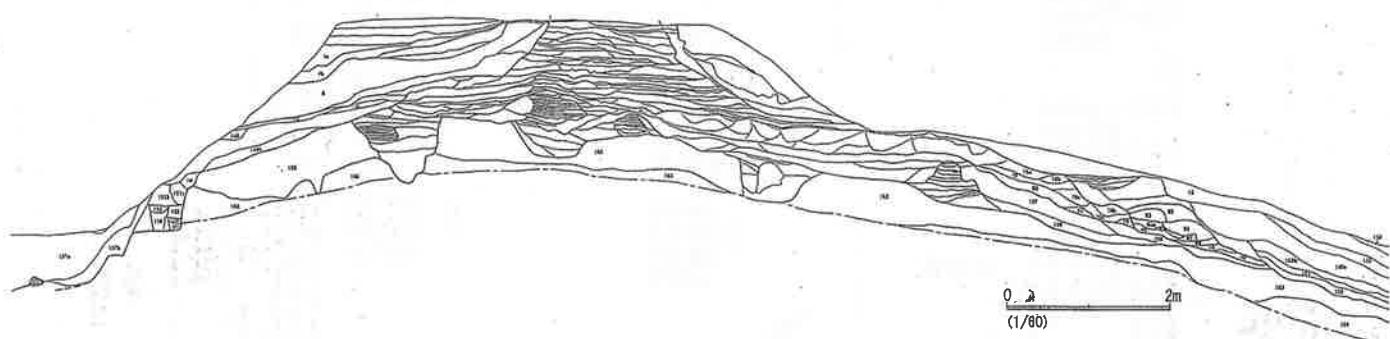
福岡市教委『比恵29—比恵遺跡群第72次調査概要』2001

同『比恵44—比恵遺跡群第97次調査報告一』2006

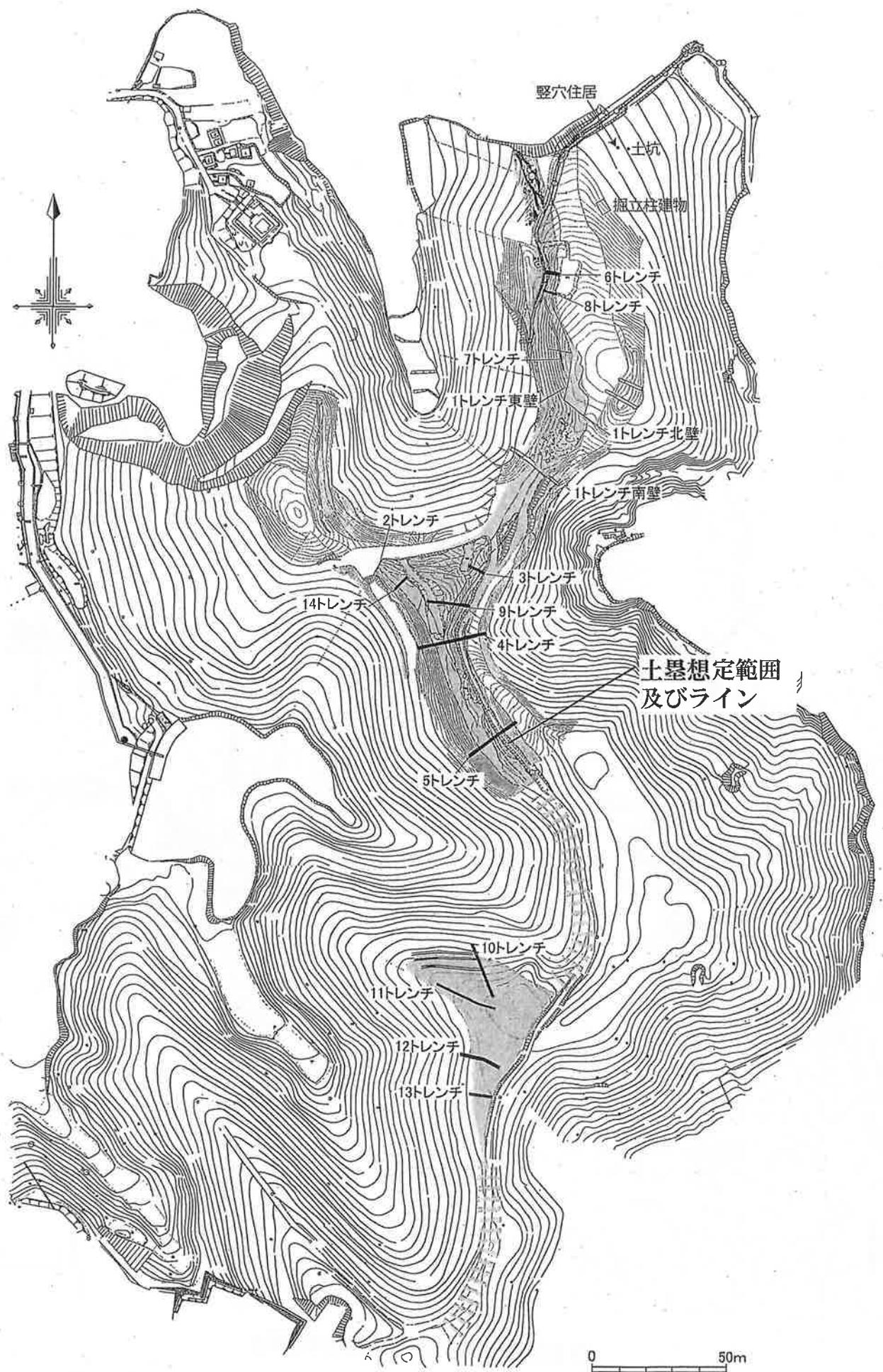


大宰府羅城推定図

黒線…阿部義平氏による土塁推定線
赤線…前畠遺跡土塁から推定した外郭線



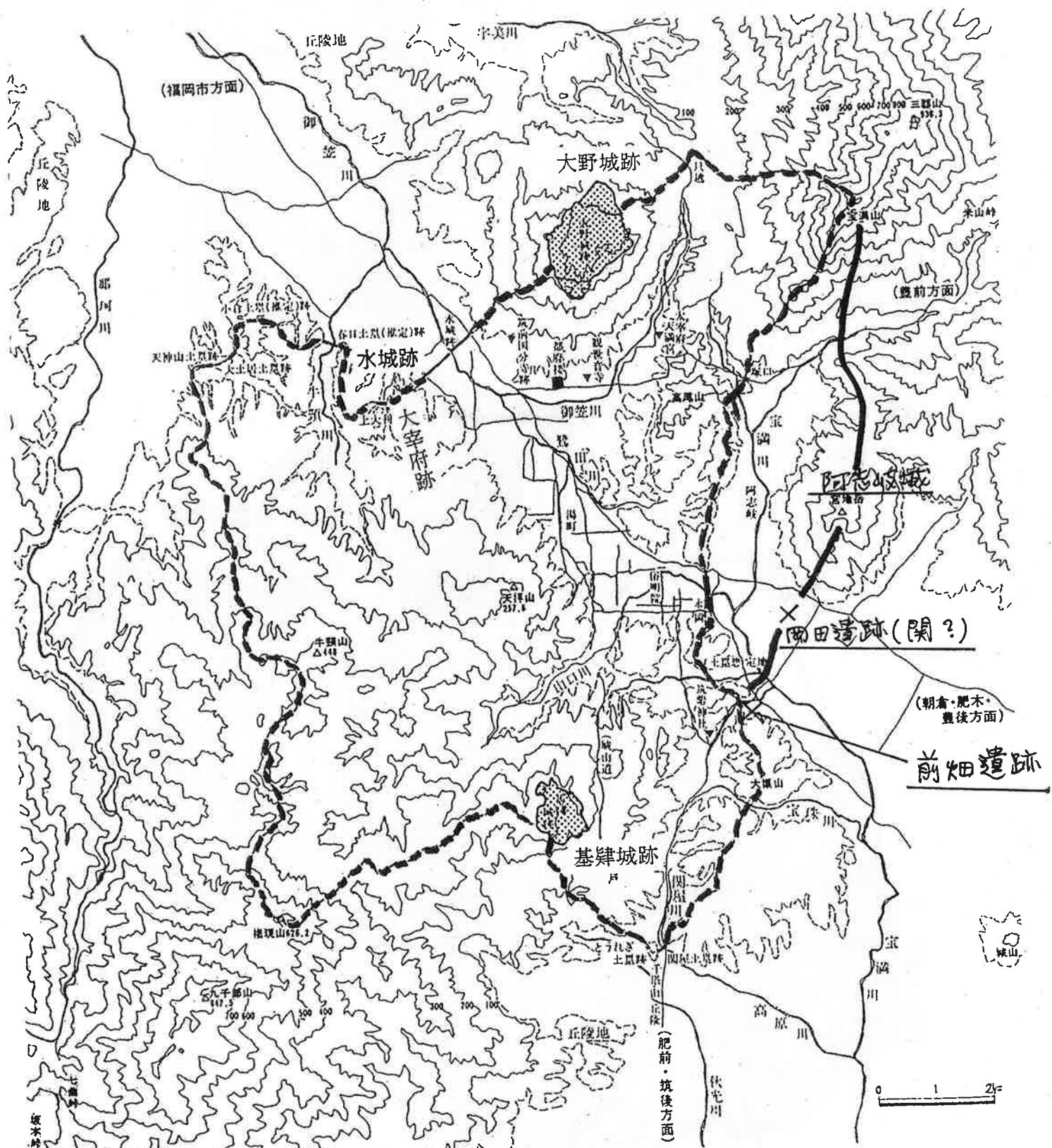
1トレンチ横断土層(南壁)



土墨想定ライン及びトレンチ配置図

小鹿野亮・海出淳平・柳智子, 2014 「紫紫野市前畠遺跡の土墨遺構について」
第9回 西海道古代官衙研究会 資料集

大宰府の羅城と水城



阿部義平氏の提示した大宰府羅城

阿部義平 1991 「日本列島における都城形成一大宰府羅城の復元を中心にー」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集

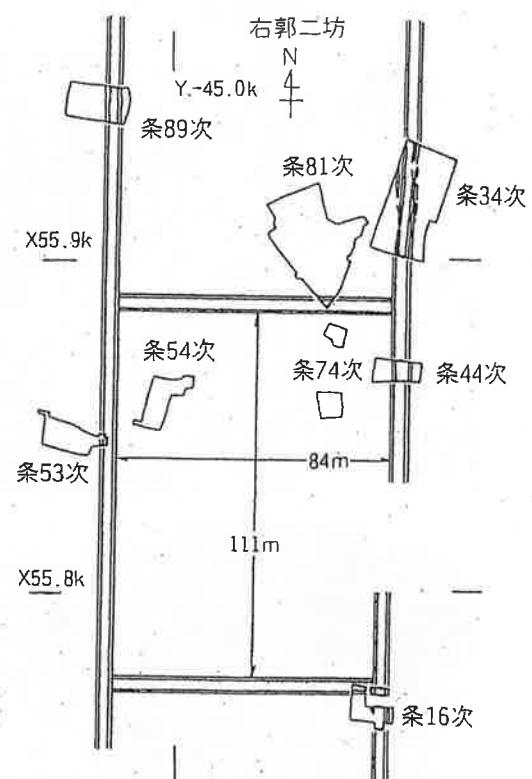
大宰府条坊

条坊制—南北22条，東西各12坊（鏡山猛案）の碁盤目の街割り

条坊の1区画は条里の1町に該当 → $2.4 \times 2.6 \text{ km}$ 四方



大宰府条坊



条坊一区画の復元

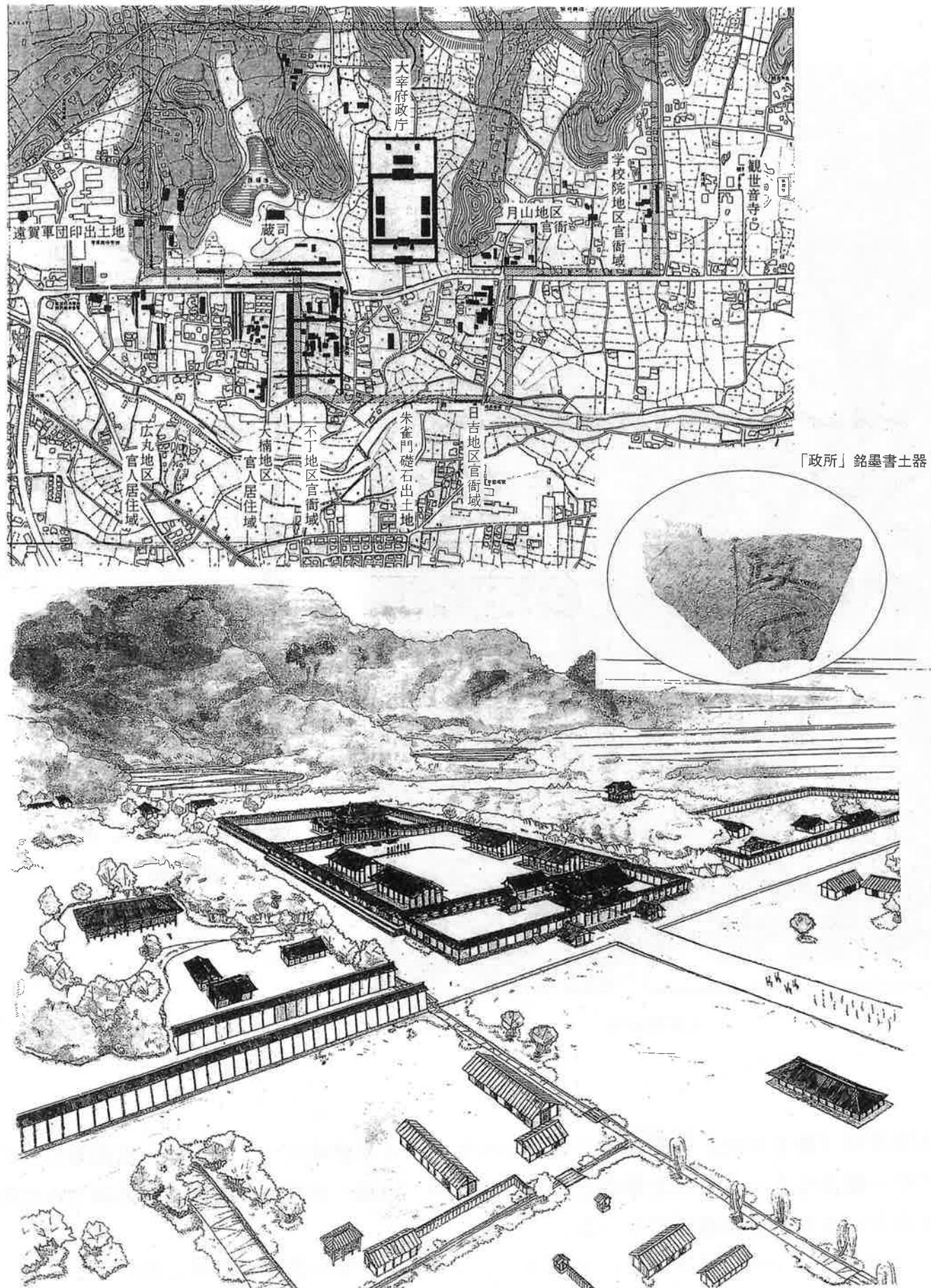
(政庁Ⅲ期 : 1/2,500 狹川説)

- ・長方形区画
- ・南北111m × 東西84m

大宰府は『続日本紀』じんごけいしん 神護景雲三年（七六九）十月甲辰条に「この府は人物殷繁にして、天下の一都会なり」と自らを都會と称しているが、水城・大野城・基肄城で防御された他に例をみない古代の城郭都市であった。

小田和利, 2009 「大宰府ヒムラの暮らし」『平成21年度新九歴研講座』配布資料

大宰府の中枢をなす大宰府政府は北側に四王寺山をひかえ、東西は四王寺山から伸びた丘陵によって挟まれた空間を占めている。そのため政府は周囲と隔絶した景観を形成している。南側には御笠川が西流し、これを南限に大宰府の諸官衙が広がっている。





南門跡の発掘調査（昭和43～44年）

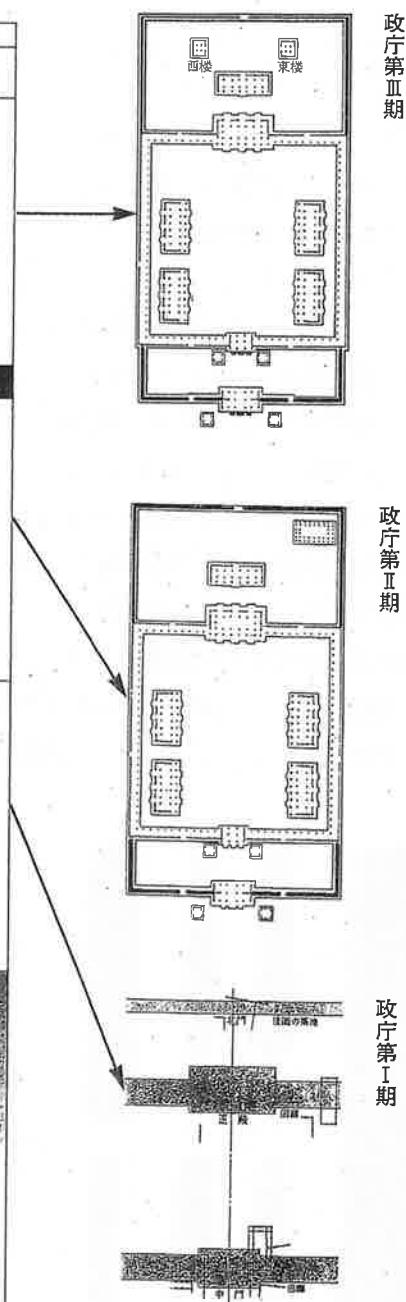
南門・中門跡の発掘調査によって、政庁の建物は三期にわたることが、はじめて判明した。

造営以前の旧石器、縄文、弥生、古墳時代人の生活の痕跡は大宰府の至るところで認められる。しかし、それらの多くは大宰府の至るところで認められる。一方、成立後の大宰府では、政庁で三時期の建物変遷があつたことが発掘によって明らかになっている。特に、II・III期の建物は礎石の上に朱色の柱が建ち並び、周囲の景観も大きく変えた。

表土 江戸時代の整地層	
	礎石
	「安楽寺」銘を消して再利用した瓦
	礎石
	II期整地層
	III期整地層
	「安樂寺」銘を消して再利用した瓦
	礎石
	I期整地層
	礎立柱
	蔵司整地層から出土した 7世紀後半の土器
	古墳時代の土器 古墳や住居跡から出土
	弥生時代の土器 貯蔵穴から出土
	旧石器・縄文時代の土器・石器 大宰府の様々な土層に混じって出土

大宰府政庁の土層と時期決定の遺物

九州歴史資料館、1998『大宰府復元』図録



大宰府政庁建物変遷図

九歴だより

No.43
2016.4

大宰府不丁地区官衙跡の調査成果

大宰府不丁地区官衙跡は、大宰府政庁跡の南西に位置する官衙（役所）跡です。現在、大宰府政庁跡の南側は住宅地となっていますが、住宅地の下には区画整理に伴う発掘調査により大規模な建物が広範囲に存在することが判りました。

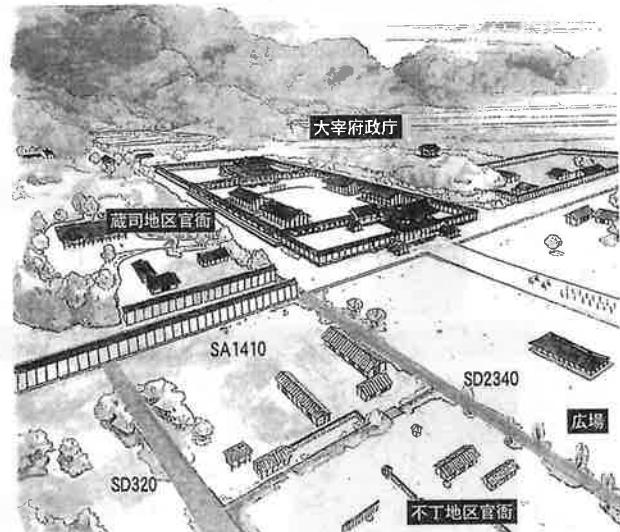
不丁地区官衙跡の範囲は、東側の政庁跡前面広場との境が南北溝 SD2340（幅約 6 m）によって区切られ、西隣の大楠地区官衙跡との境は南北溝 SD320（幅約 16 m）で区切られており、両溝間の距離は約 76 m となります。ただ、SD2340 は、8世紀後半には役割を終え、その後は板塀に替わったものとみられます。一方、SD320 は 11世紀後半まで存続します。南北域については、北側が蔵司地区官衙跡南端の築地 SA1410 の前面に想定されている東西溝で、南端が朱雀門の礎石が発見された御笠川までの南北長約 220 m となります。

官衙跡の内部は、東西溝によって三分割され、総数 63 棟の建物を確認しました。建物は 7世紀後半から 10世紀中頃にかけての変遷がみられますが、その最盛期は 8世紀前半から 9世紀中頃にあります。しかし、11世紀以降には黒色粘土を掘削した土取り場となり、官衙としての役目が終わります。

なお、先ほどの SD2340 からは 186 点の木簡が出土していますが、天平六年（734）・同八年（736）の紀年銘木簡、軍團・南島（奄美島・伊藍島）・紫草に関する木簡もあります。なかでも、南島に関する木簡は、大宰府の支配が遠く南方まで及んでいたことを示す貴重なもので、紫草に関する木簡は、大宰府の所司の一つである「貢上染物所」に関するものとみられています。その他に、墨書土器・刻書き土器・硯などの文字に関する資料、製塩土器・漆付着土器などの生産関連遺物、輪羽口・鋳型・坩堝・鉄滓などの製鉄・鋳造関連遺物も他の官衙跡に比べて多量に出土しています。

また、文字資料のなかには、「主典」・「政所」・「匠司」・「細工」（所）などの官職及び所司名を記したものが出土地で出土しており、不丁地区官衙には事務的官司と工房的官司が併存していたことを裏付ける資料と言えます。

現在、九州歴史資料館では、大宰府政庁の周辺に造営された官衙の正式報告書を順次刊行しており、新たな事実が次々に明らかとなっています。それについては、九歴講座・展示などで紹介していきたいと考えています。



政府前面官衙想像図



付札木簡

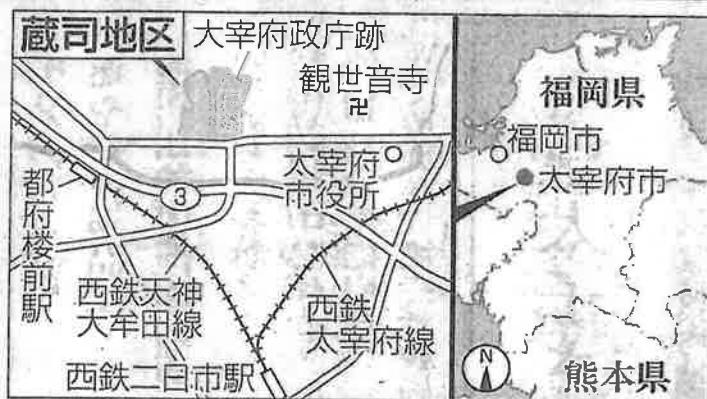
大宰府・藏司に倉庫群跡 役所の存在裏付け



大宰府跡・藏司地区で見つかった倉庫群の跡を説明する九州歴史資料館の担当者 11月13日午後、福岡県太宰府市

福岡県太宰府市の大宰府から10世紀にかけての倉庫群とみられる建物跡が初めて見つかった。九州歴史資料館（九歴、同県小郡市）が13日発表した。これまで小字名や文献史料を踏まえ、同地区に古代九州の中核・大宰府の財政を担当する官衙（役所）の「藏司」

（10月14日付「西日本新聞」）



があつたと考えられてきたが、物資を保管する施設が確認されたことで、存在が考古学的に裏付けられた。藏司地区は政厅跡西側の丘陵にある。発見されたのは、倉庫に適した総柱構造の礎石建物2棟。いずれも南北5間（12尺）、東西3間（7・2尺）。南北に規則的に配置され、瓦ふきの高床式倉庫と推定される。大宰府の北にある大野城跡などで見つかった倉庫群よりも規模が大きいという。出土した瓦などから時期を推定した。礎石は後世に抜き取られ、四つしか残っていない。

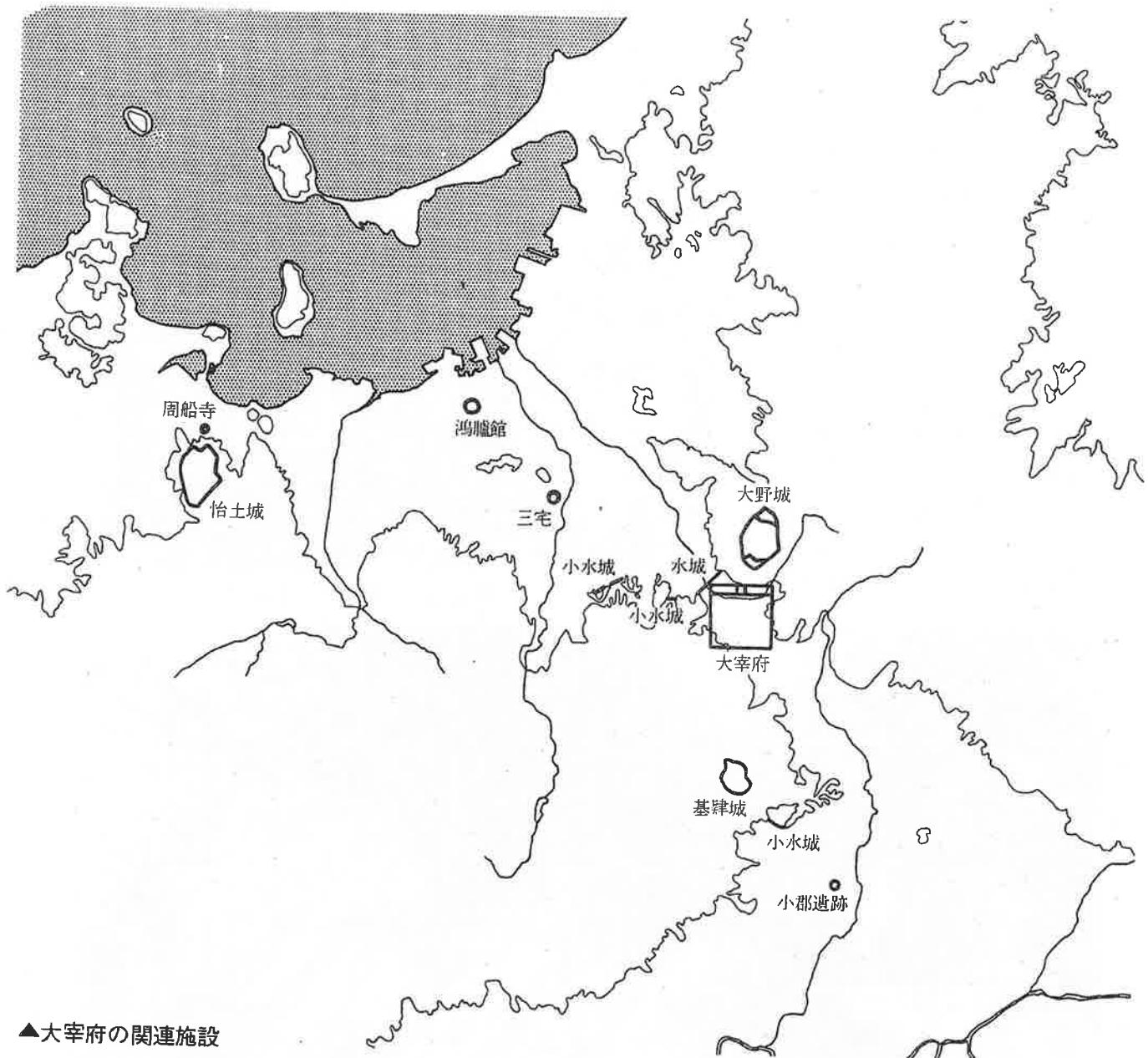
可能性があり、九歴は発掘調査を続ける。担当者の下原幸裕技術主査は「建物群の始まりや配置などを解明し、官衙の性格を検討したい」と話す。

同地区では過去に、機能が分からぬ大型礎石建物（8世紀～9世紀）が見つかった。官衙の管理棟や迎賓館、「帥」（長官）の館など研究者によつて見解は分かれるが、倉庫群の発見によつて位置付けが定まるそうだ。

18日午後1時半から現地説明会を開く。駐車場はない。九歴10月9日（75）9575。（野村大輔）

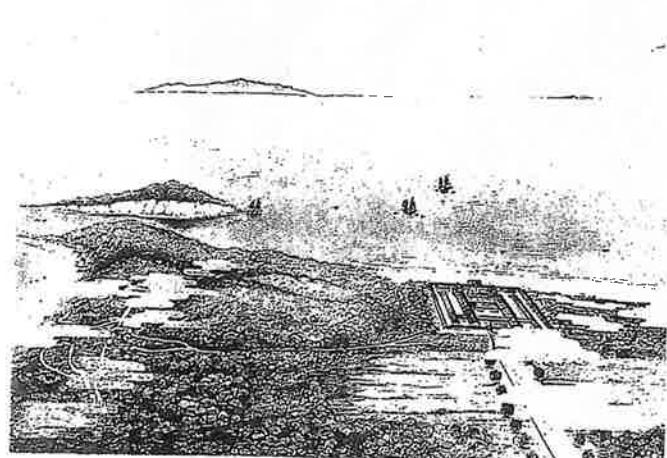
大宰府鴻臚館関係年表

時代	西暦	和暦	関連する主なできごと	中國	朝鮮
飛鳥・藤原	663	天智2	白村江の戦いで百濟救援の日本軍が唐・新羅連合軍に敗れる。	(618) 唐 698	高句麗 百濟 660 668
	664	天智3	対馬・壱岐・筑紫に防人と烽を置き、筑紫に水城を築く。		
	686	朱鳥元	新羅客を饗すため川原寺の伎楽を筑紫に運ぶ		
	688	持統2	筑紫館で新羅国使を饗す。(筑紫館の初見)		
	701	大宝元	大宝律令を制定。		
	710	和銅3	平城京遷都。		
	736	天平8	筑紫館で遣新羅使一行が歌を詠む。		
	740	天平12	藤原広嗣が反乱を起こす。		
	759	天平宝字3	博多大津・壱岐・対馬の防備を固める。 (博多の初見)		
	776	宝亀7	遣唐使船渡航できず博多大津に引き返す。 平安京遷都。		
奈良時代	794	延暦13	遣新羅使を停止する。	渤海 海	新羅
	799	延暦18	新羅人26人が博多津に漂着する。		
	814	光仁5	遣唐副使小野篁が大宰府鴻臚館で唐人と詩を唱和する (大宰府鴻臚館の初見)		
	838	承和5	新羅人来着の時、鴻臚に安置・供給し、ただちに放還する旨の太政官符。		
	842	承和9	入唐僧円仁らの乗船が鴻臚館前に到着する。入唐僧円珍が帰国し大宰府鴻臚館にはいる。		
	847	承和14	唐商人が鴻臚北館門楼で円珍に詩を奉る。		
	858	天安2	高岳親王が大宰府鴻臚館に到着。唐商人が鴻臚北館に滞在。		
	861	貞觀3	造船1隻が鴻臚館に到着し、高岳親王らが鴻臚館を出発する。		
	862	貞觀4	新羅僧3人が博多津に到着し鴻臚館に安置。		
	863	貞觀5	来航唐商人63人を鴻臚館に安置する。		
平安時代	865	貞觀7	来航唐商人41人を鴻臚館に安置する。	907 926 五代 960	935 936 高麗
	866	貞觀8	新羅海賊が博多津の豊前國年貢を略奪して逃亡。鴻臚中島館、津厨の防備を固める。		
	869	貞觀11	統領、選士、甲冑を鴻臚館に増置する。		
	870	貞觀12	鴻臚に甲冑110具を遷置する。		
	873	貞觀15	対馬漂着新羅人31人を鴻臚館に身柄拘束。		
	876	貞觀18	唐商人31人が荒津岸に着き、安置供給。		
	894	寛平6	遣唐使を停止する。		
	895	寛平7	博多警固所に夷俘50人を増置する。		
	927	延長5	大宰府の兵馬20匹を鴻臚館に分置する。		
	931	承平元	大宰府警固所に驚が集まる怪異現象あり。		
時代	940	天慶3	藤原純友が反乱を起こす。	960	高麗
	945	天慶8	吳越船を鴻臚所に曳航して安置する。		
	1009	寛弘2	大宰大式藤原高遠が博多の館で和歌を詠む。		
	1019	寛仁3	刀伊賊徒が筑前に来襲する。		
	1047	永承2	大宰府が宋客宿房放火犯4人を捕らえ禁獄。		

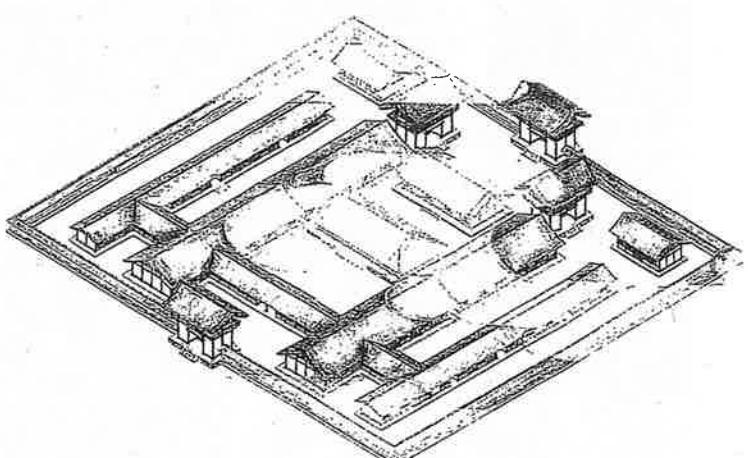


▲大宰府の関連施設

九州歴史資料館、1978『更生の遠、朝廷 大宰府展 営成10周年記念』図録

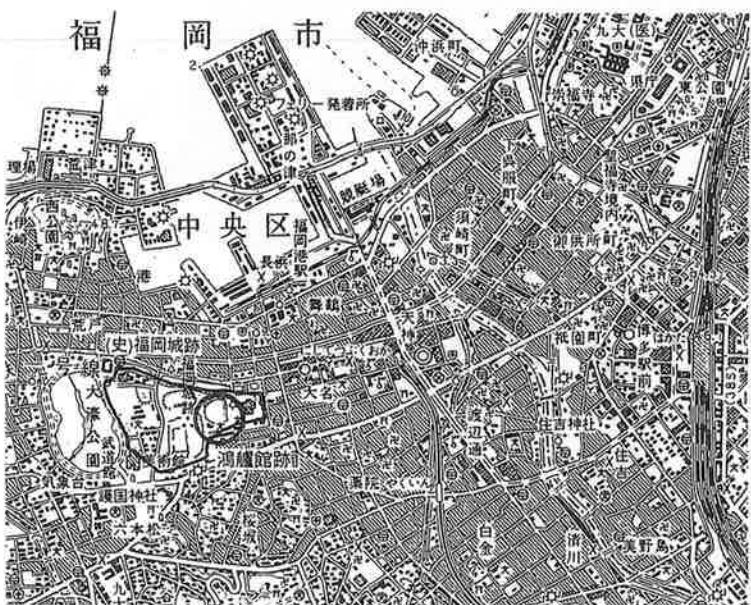


△平安時代の鴻臚館周辺の景観(想像復元)

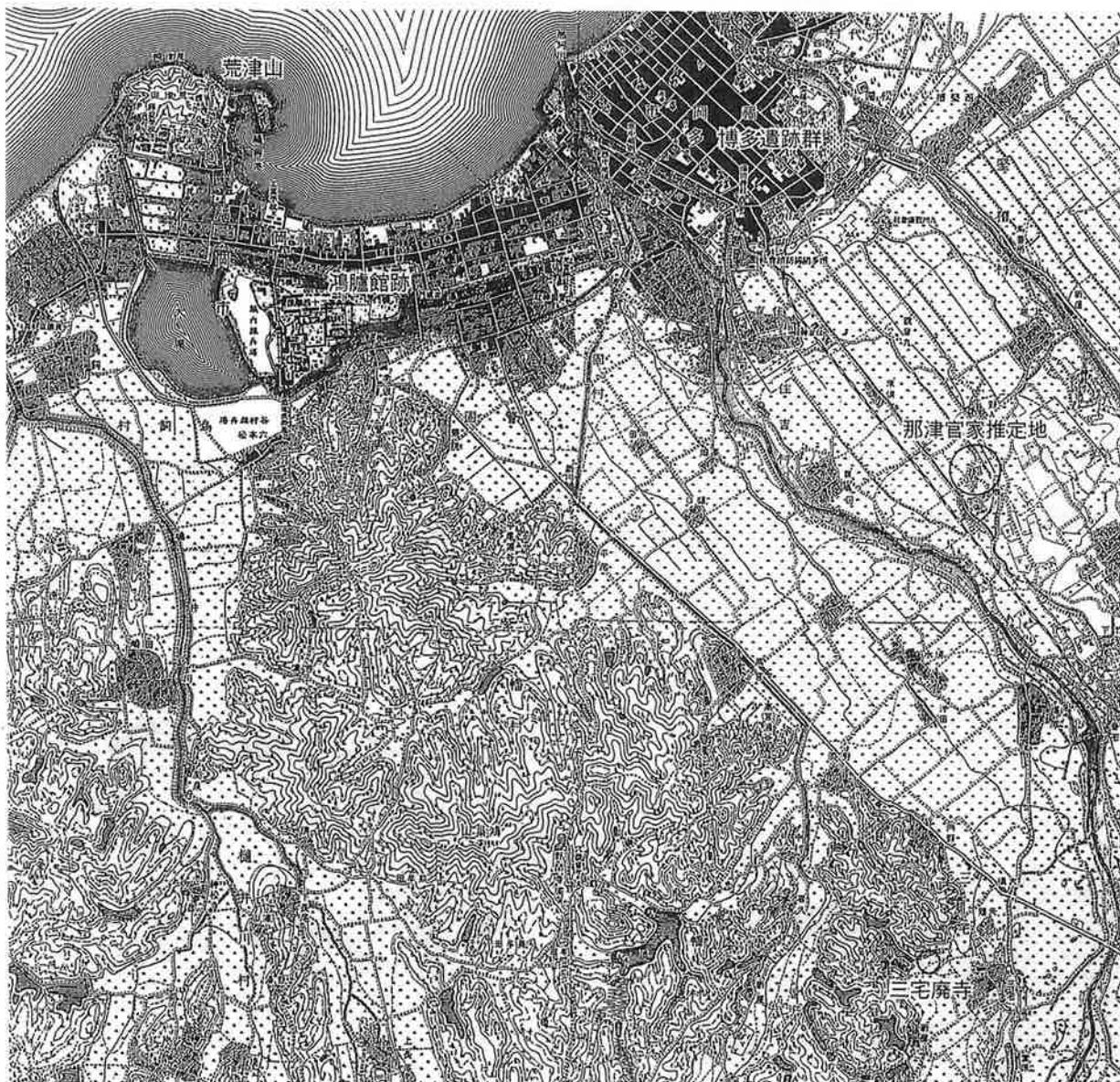


△鴻臚館想像復元図 (澤村仁愛知瑞穂短期大学教授による)

天智朝は、664年福岡平野の最奥部を水城で画し、665年大野城・基肄城を築き、福岡平野の那津官家に置かれたと推測される筑紫大宰を移して大宰府を造営したと考えられている。この時期の大宰府の退転と海岸部の外交施設の造営とが無関係とは考えられないが、鴻臚館の前身である筑紫館の初見は、688年まで下る。鴻臚館の名称は、弘仁年間（810～824）に唐の外交を司る官署である「鴻臚寺」に倣って改称したものと考えられている。

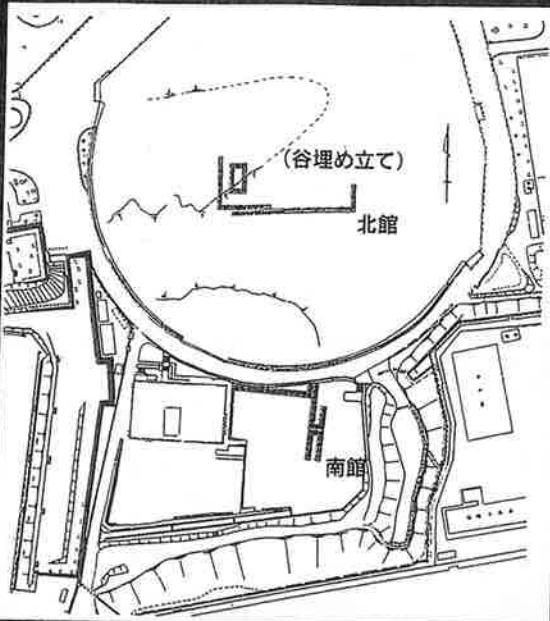


鴻臚館跡位置図（1/25000）

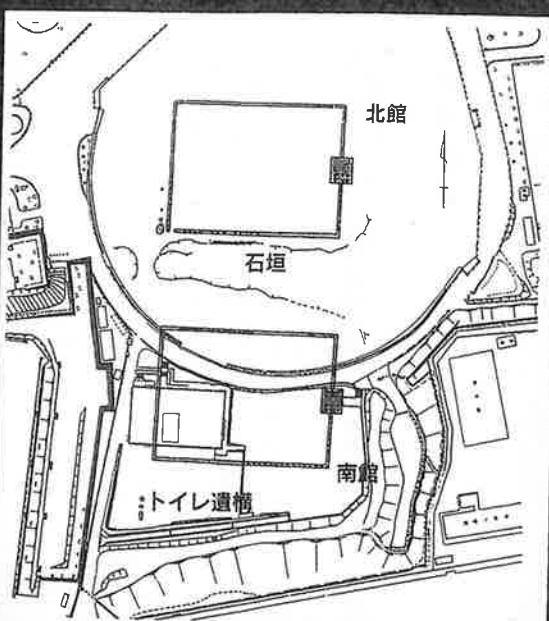


鴻臚館跡周辺地形図（明治33年、1/20000）アミは推定自然地形

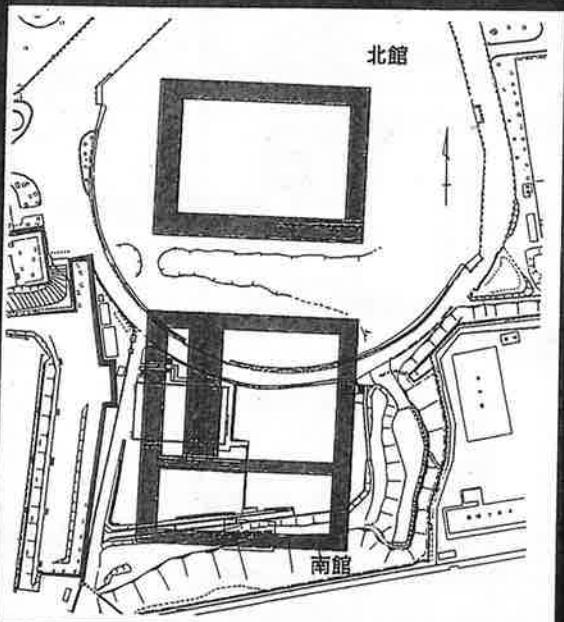
福岡市教育委員会、2004『鴻臚館跡 14』『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第793集



鴻臚館第Ⅰ期:7世紀後半



鴻臚館第Ⅱ期:8世紀前半～8世紀中頃



鴻臚館第Ⅲ期:8世紀後半～9世紀前半
※第Ⅲ期の建物範囲は推定

鴻臚館建物の復元

鴻臚館は7世紀後半に第Ⅰ期の建物が建てられている。検出された鴻臚館の建物は大きく三時期に区分することが可能で、時期を下るに従い、建物の規模や構造が大きくなっていることがわかる。

●-[第Ⅰ期/7世紀後半]

この地に鴻臚館(筑紫館)が最初に建てられた頃、建物は掘立柱建物で、谷を挟んで南北に掘立柱建物が建てられており、この時期に既に北館と南館がそれぞれ存在していた。北館と南館では建物の主軸がずれており、建物の配置も北館と南館で対称形ではない。建物の周囲には築地塀の基礎とみられる布堀りが巡らされる。北側斜面に壁面保護のための石垣が築かれたのはこの時期である。

福岡市博物館、2007『古代の博多
鴻臚館とその時代 鴻臚館跡
発掘20周年記念特別展』(四録)

●-[第Ⅱ期/8世紀前半]

南北に布堀り工法によって建てられた掘立柱列による塀が設けられ、東側の中心に門を設けており、出入りにはこの東からの出入り口を利用したものとみられる。北と南の建物は主軸方向や規格が同じであるため、南北同時に施工したものと考えられる。また南館南西側と北館南西側にトイレが設けられた。南館と北館はほぼ並列し、東側の塀の前面に沿って両者を繋ぐ土橋(後に木橋に掛け替えられる)を作り、谷を挟んだ両者の行き来に便を図った。

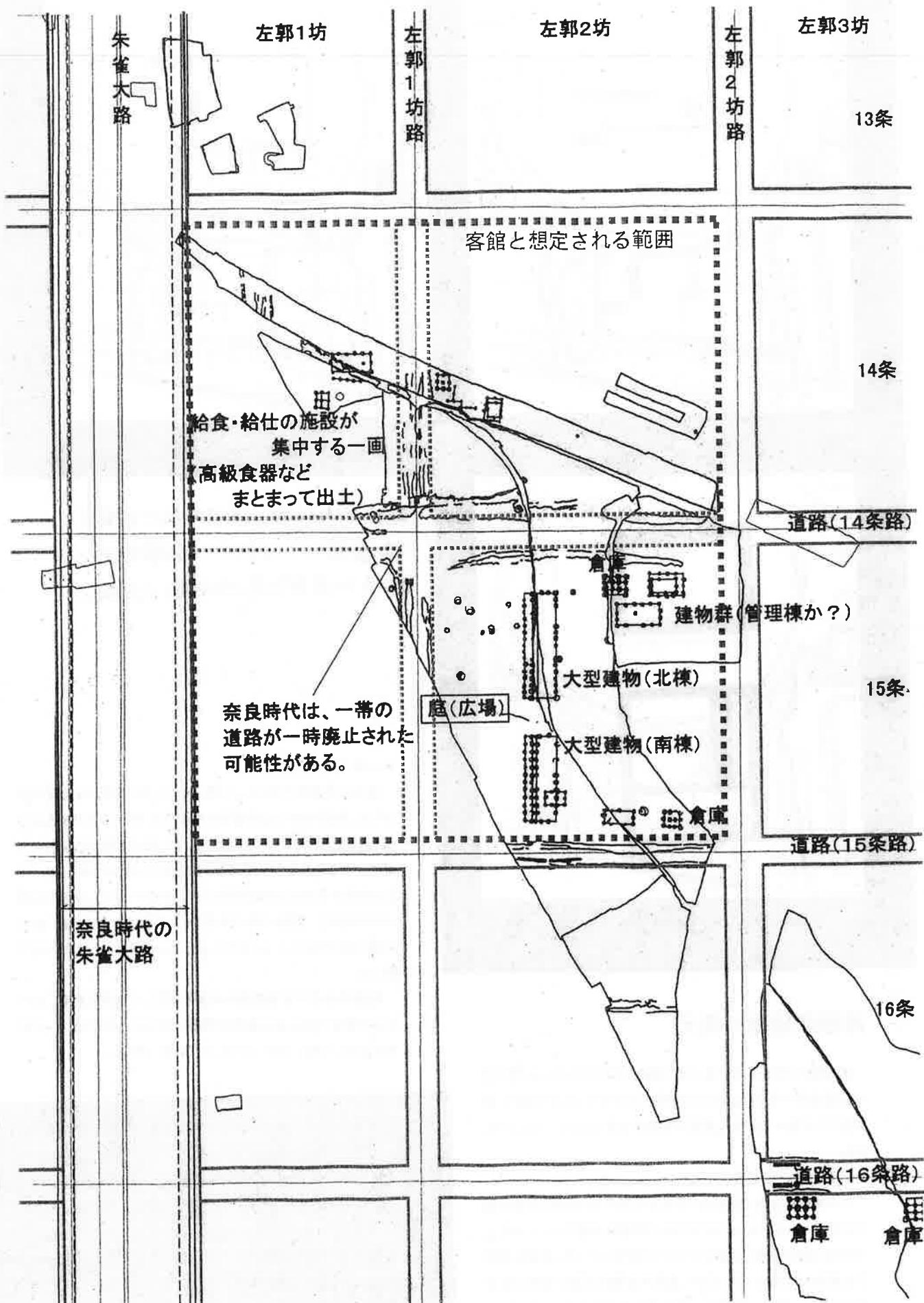
阿部仲麻呂や吉備真備らが遣唐使として博多を通過したのはこの時期であり、また鑑真が苦難の末日本にたどり着き、大宰府を経由して都に向かったのもこの時期にあたる。

●-[第Ⅲ期/8世紀後半～9世紀前半]

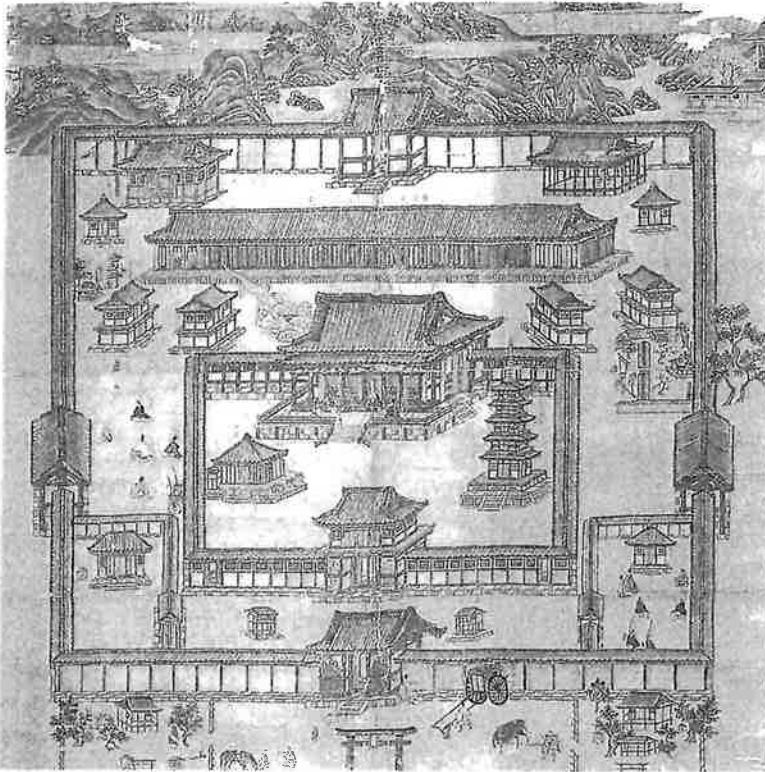
大型の礎石建物と周囲を囲む回廊状の建物が造られる。内部には南北方向の幅4間の縦柱礎石建物が造られ、南館の南側には南門と南門へ続く回廊が新たに造られ、前代の規模から大きく拡張し、鴻臚館の規模全体が前代より大きく拡張する。空海や最澄らが遣唐使として博多を通過したのがこの時期である。

●-[第Ⅳ・V期/9世紀後半～11世紀前半]

この時期の建物はまだ検出していないが、瓦や陶磁器などからこの時期まで鴻臚館が存続していたことが認められる。建物跡は認められないが遺物量は多く、この時期の土坑から中国製陶磁器やイスラムガラス器が出土している。



太宰府市教育委員会, 2011 大宰府跡内 宿館 (8~9世紀) 大宰府跡跡現地説明会資料



観世音寺絵図



国宝 観世音寺梵鐘

政府の真東に位置する観世音寺は、朝倉橋広庭宮で逝去した母齊明天皇の菩提を弔うために、天智天皇の勅命により建立された。九州の寺院の中心であったこの寺には七堂伽藍を兼ね備え、日本三戒壇の一つ西戒壇が置かれ、「府の大寺」とよばれた。その莊嚴の様は、発掘調査によつて確認された大規模な塔や講堂の遺構、貴重な遺物の数々からも窺い知ることができる。

また政庁の西北、大野山の山麓には、七重塔がそびえる筑前国分寺、国分尼寺があり、日々国家安泰と人々の平安が祈られた。



唐三彩壺片（観世音寺出土）



新羅仏（観世音寺出土）



筑前国分寺七重塔 1/10 復元模型

（太宰府市文化ふれあい館）



観世音寺講堂跡発掘状況

九州歴史資料館、1998『太宰府復元』太宰府史料叢書調査30周年記念特別展（図録）

宝満山とは

宝満山は、福岡県太宰府市の東北にそびえ、古来より信仰を集めて来た靈山である。南方の筑紫野市側からは、美しい笠の形をした独立峰としてみえるので、古くは御笠山と呼ばれた。山から流れ出る宝満川と御笠川は筑紫平野と福岡平野を潤し、ゆえに農耕の守り神として信仰されて来た。7世紀後半、その山麓に大宰府が置かれると、御笠山は竈神を祀り、大宰府の鬼門の方角（東北）を守る神として国家的祭祀が行われる山となる。竈門神社が創建され、御笠山は竈門山と呼ばれるようになった。『延喜式』神名帳にも筑前國御笠郡の項目に「竈門神社_{名神大}」とある。

奈良時代には国家と深く結び付いた八幡神とのつながりをもつようになる。竈門山の神は宝満大菩薩と呼ばれ、八幡神の娘とされた。ここから宝満山の名が起り、宝満大菩薩は龍王の娘であることから、海神の娘である玉依姫命と同じ神として信仰されるに至った。竈門神社は玉依姫命を祭神とし、玉依姫命からみて、神功皇后を左、八幡神（応神天皇）を右に祀っており、八幡宮と密接な関係を持っていることを示している。

宝満山が三つの山名を持つのは、この靈山に対する信仰のあり方がこのような変遷をたどったことによるのである。

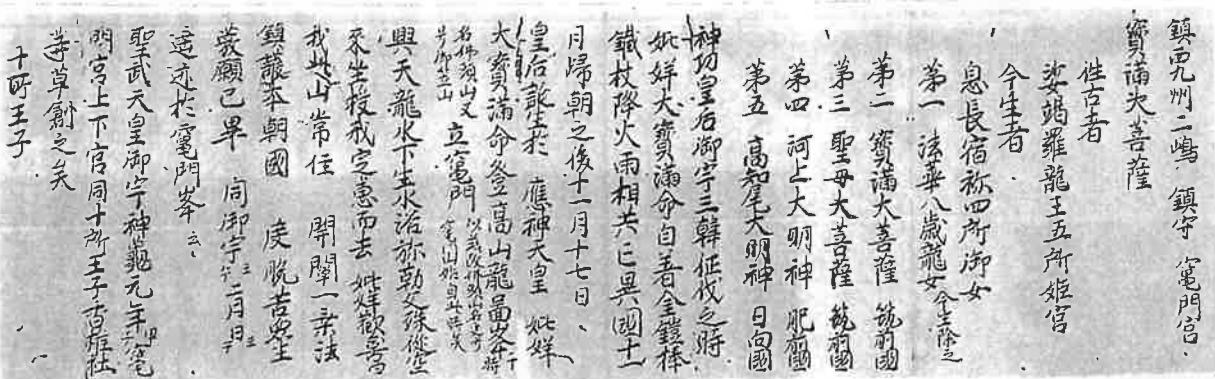


竈門三神坐像 3軀

像高 玉依姫命像 30.5cm 神功皇后像 29.9cm 応神天皇像 35.3cm
木造 彩色／桃山時代・16世紀／福岡県・竈門神社蔵

竈門神社本殿内に祀られる竈門三神坐像。いずれも頭体部をヒノキ材の一木から彫出し、膝前部に別材を矧ぎ付ける（神功皇后像、応神天皇像ともに膝前部失）。小像ながら、顔立ちは端整であり、装束も簡素かつ丁寧に表現する。像の形式や作風から、慶長2年（1597）小早川隆景による社殿復興時の制作とみてよい。なお、玉依姫命像の背面中央には竈状の割りが施され、蓋をあてており、かつてここに何かを納めていたものと思われる。

（楠井）



竈門山宝満大菩薩記 1冊

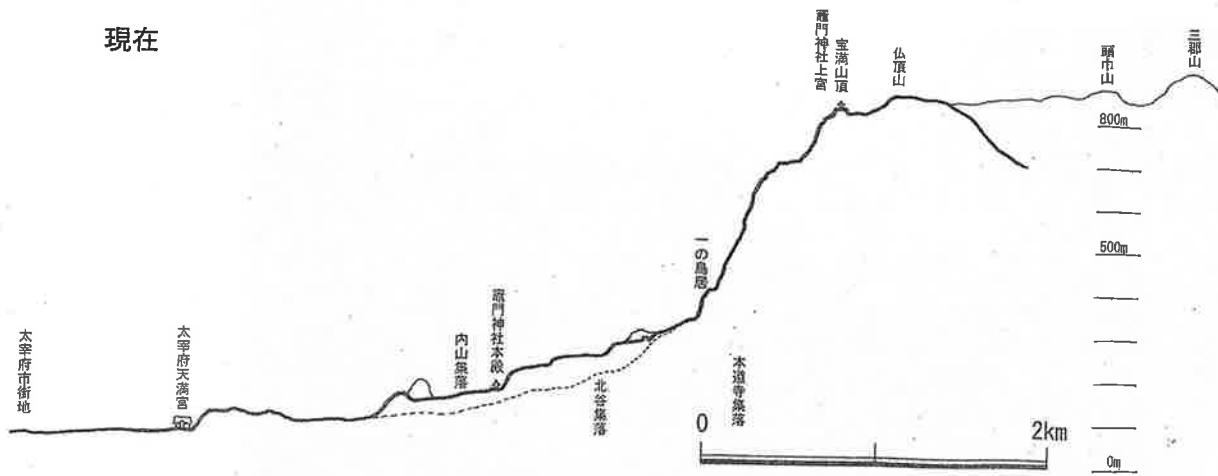
縦 16.2cm 横 13.5cm 全長 81.1cm
紙本墨書
鎌倉時代・13～14世紀
神奈川県・称名寺蔵

竈門神社最古の縁起。称名寺2代住職劍阿（1261-1338）の手沢本。八幡宮と宝満山の神の系譜を記し、神功皇后の三韓征討伝承における活躍により、九州の鎮守となったことを述べる。また、竈門神社、筥崎宮、宇佐宮が、宝満大菩薩・聖母大菩薩（神功皇后）・八幡大菩薩（応神天皇）の同じ三神を祀り合っていることを記しており、中世において、宝満山の神が八幡宮と密接な関係を持っていたことを示している。

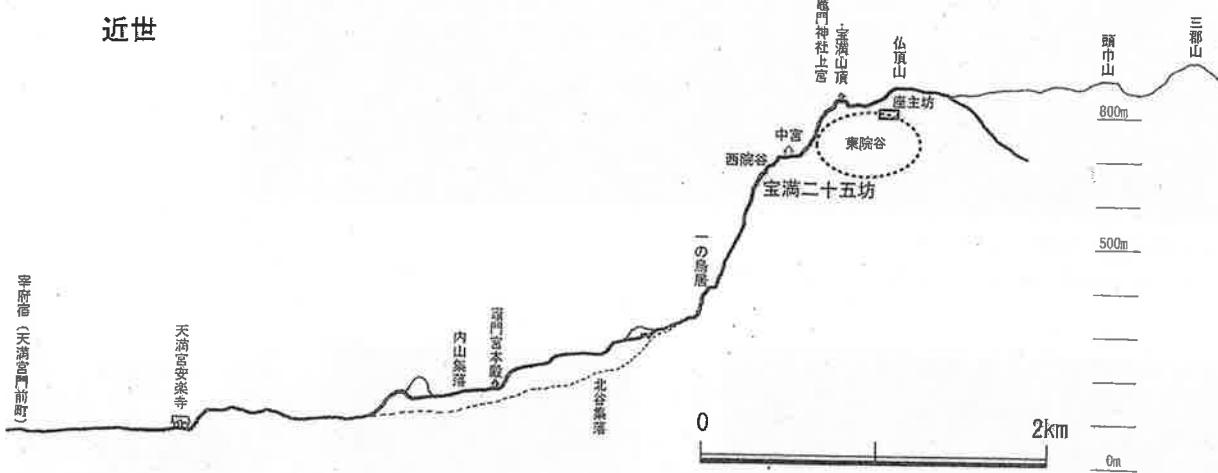
（酒井）

九州国立博物館、2009『ねぐらの山 宝満山』トピック展示 図録

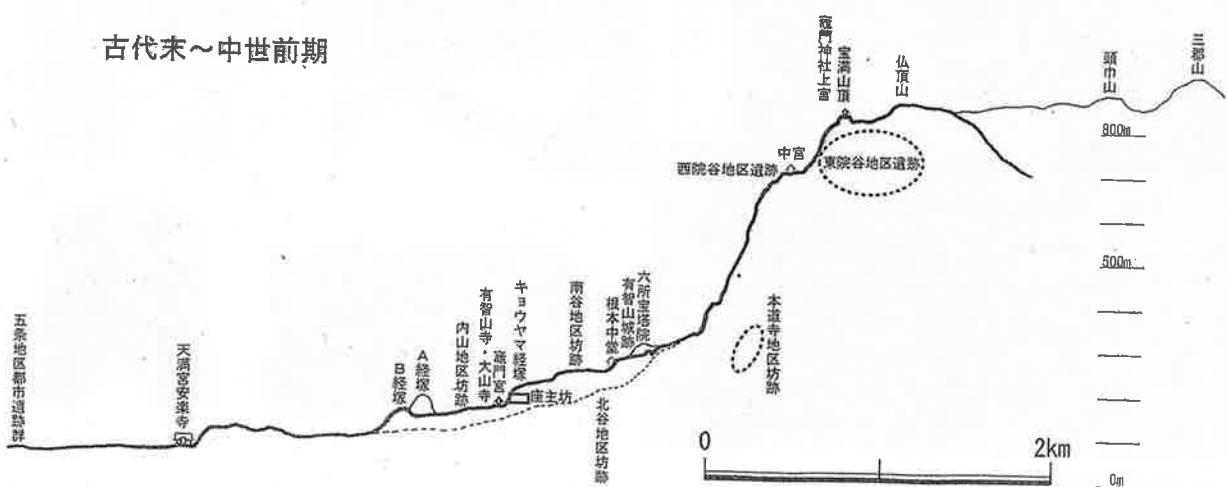
現在



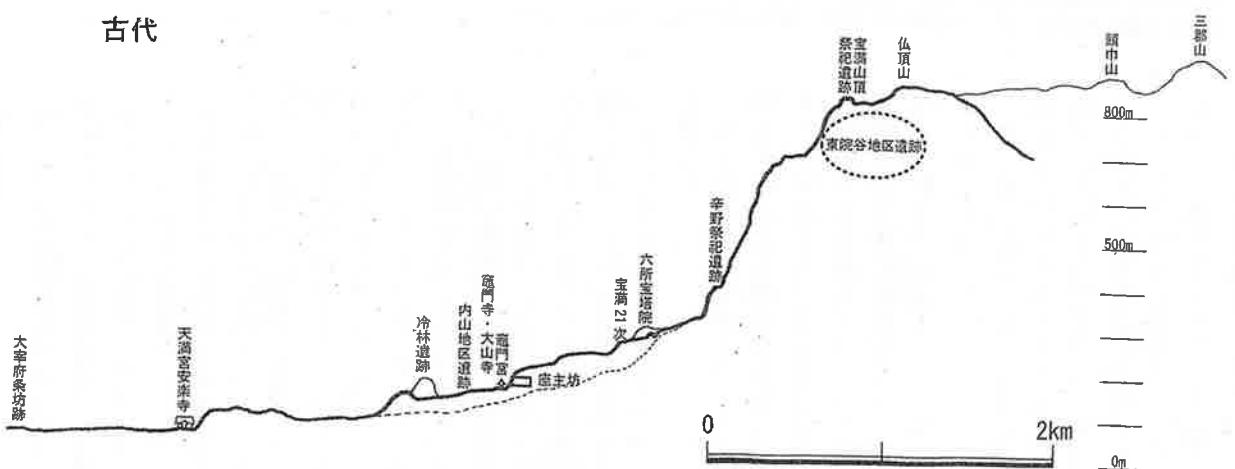
近世



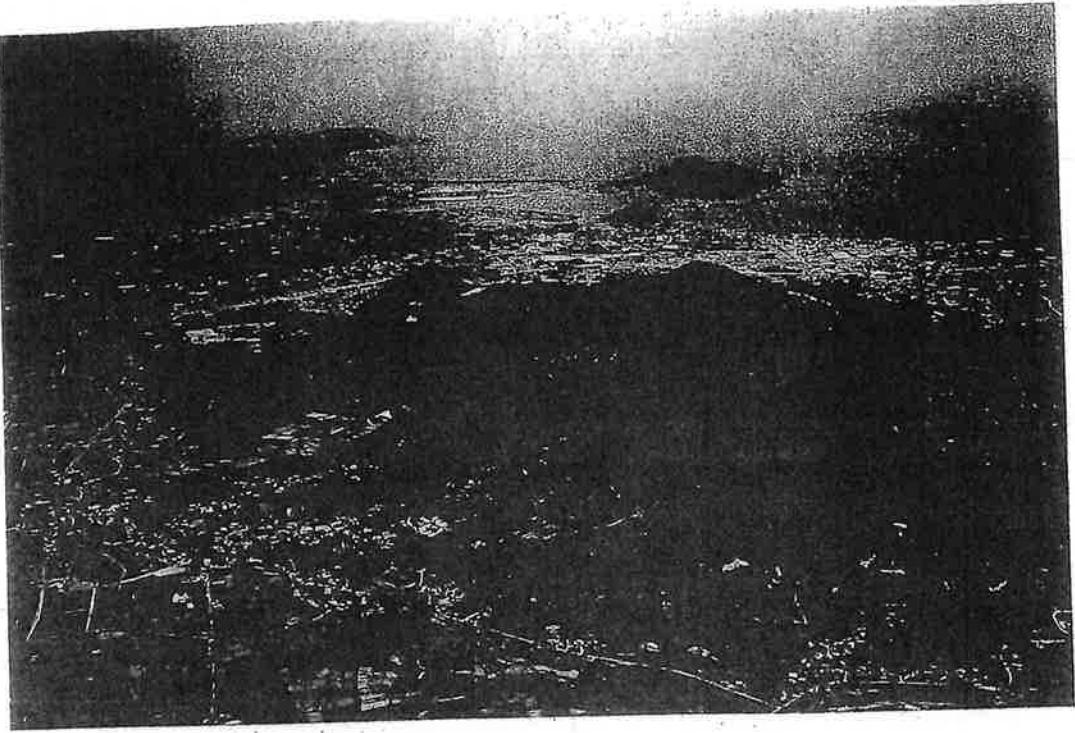
古代末～中世前期



古代

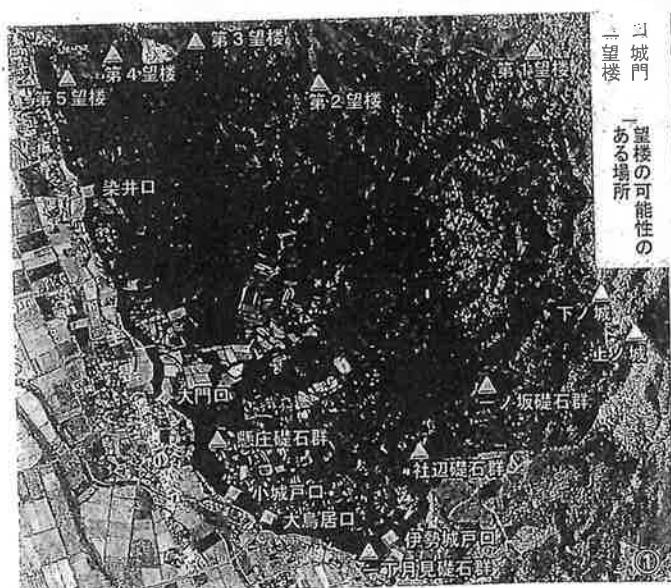


太宰府市教育委員会, 2010『宝満山遺跡解説』6『太宰府市文化史』第111集



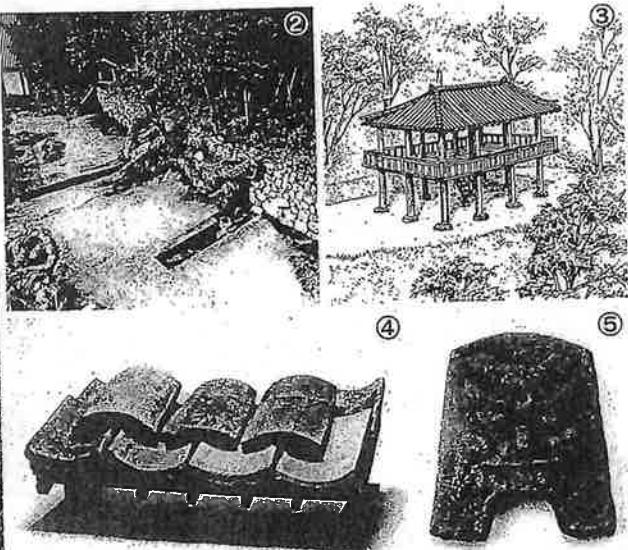
怡土城を空から眺める（南から）

怡土城は唐津方面と大宰府方面を繋ぐ官道を抑える外交・防衛上重要な位置にある高祖山に築かれた。遠くに博多湾が見える。



怡土城の防衛施設と出土遺物

①上空からみた怡土城の範囲と施設の分布（高祖山の西斜面に築かれた怡土城には今も土塁や城門、望楼などの遺構が残されている。）
②土塁 ③第5望楼の想定復元図 ④瓦葺きの復元 ⑤怡土城の近くで出土した鬼瓦



怡土城は糸島の東端にそびえる高祖山（標高四一六メートル）の西側斜面から麓にかけて築かれた古代山城である。城の面積は三〇km²、山の麓には長さ約一kmの長大な土塁を築き、この前面と背面に堀が掘られ、五ヶ所に城門を開く。また、見晴らしの利く高所には望楼を配置しており、現在九ヶ所が確認されているが、高祖山の山頂にある上ノ城、下ノ城などでも古代の瓦が出土していることからこれらの場所にも望楼があつたと考えられる。

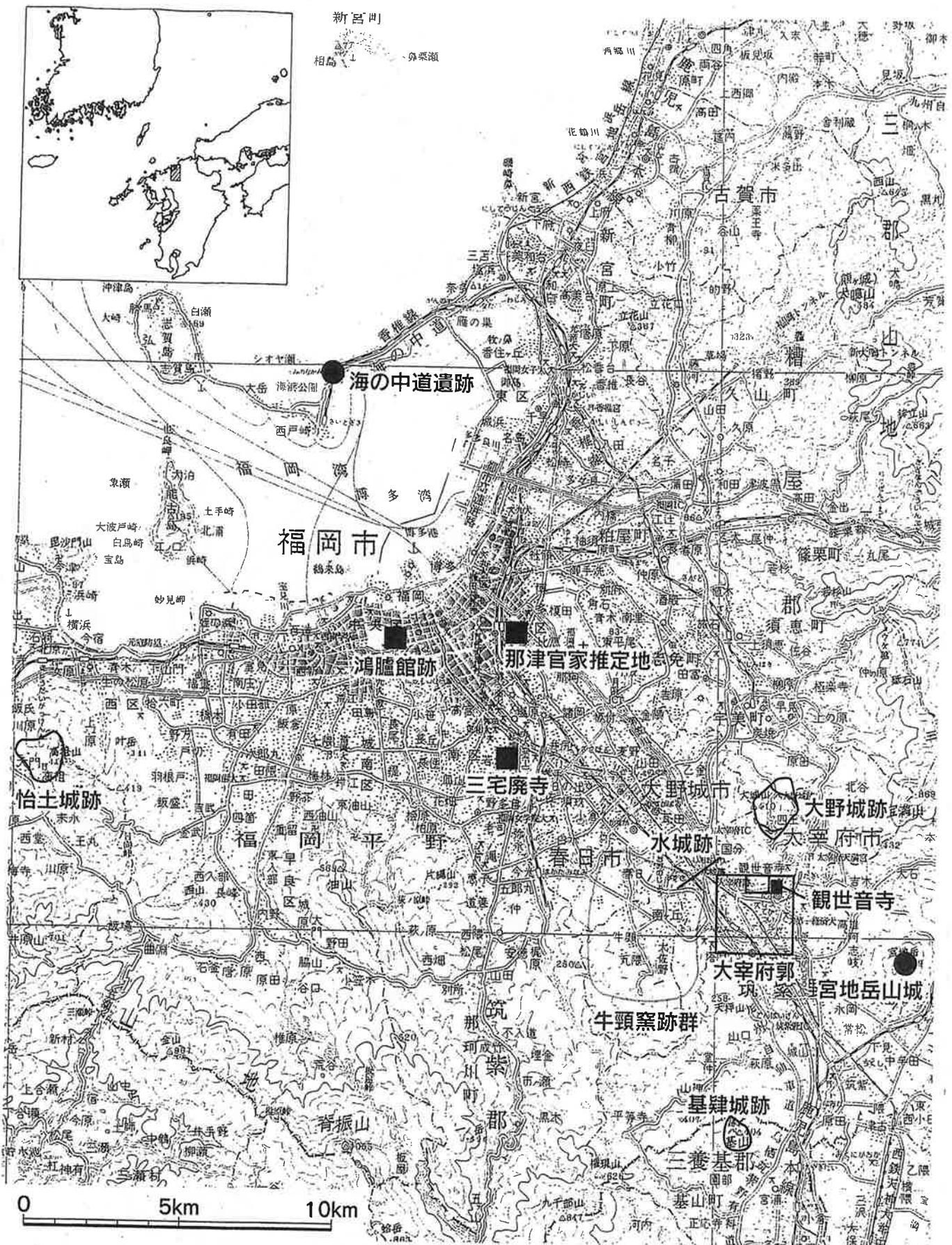
怡土城の築造の開始は『続日本紀』によると天平勝宝八（七五六）年である。当時は大宰大式の地位にあつた吉備真備の指揮で始められた。工事は途中で佐伯今毛人に引き継がれ神護景雲二（七六八）年に完成した。

怡土城の築城を始めたころは日本と朝鮮半島の新羅の関係が悪化し、緊張の高まつた時期であった。国内では新羅征討計画などの建議もあり、これを受けて大宰府防衛の最前線基地または朝鮮半島に向かう軍の兵站基地として築かれたと考えられている。

怡土城が築かれた位置は唐津方面と博多・大宰府方面を結ぶ古代官道の中間にあたり、高祖山はこの道を抑える上で非常に重要な軍事拠点であった。

今も山に登ると博多湾から糸島平野にかけて一望することができ、城をここに築いた理由を実感することができる。

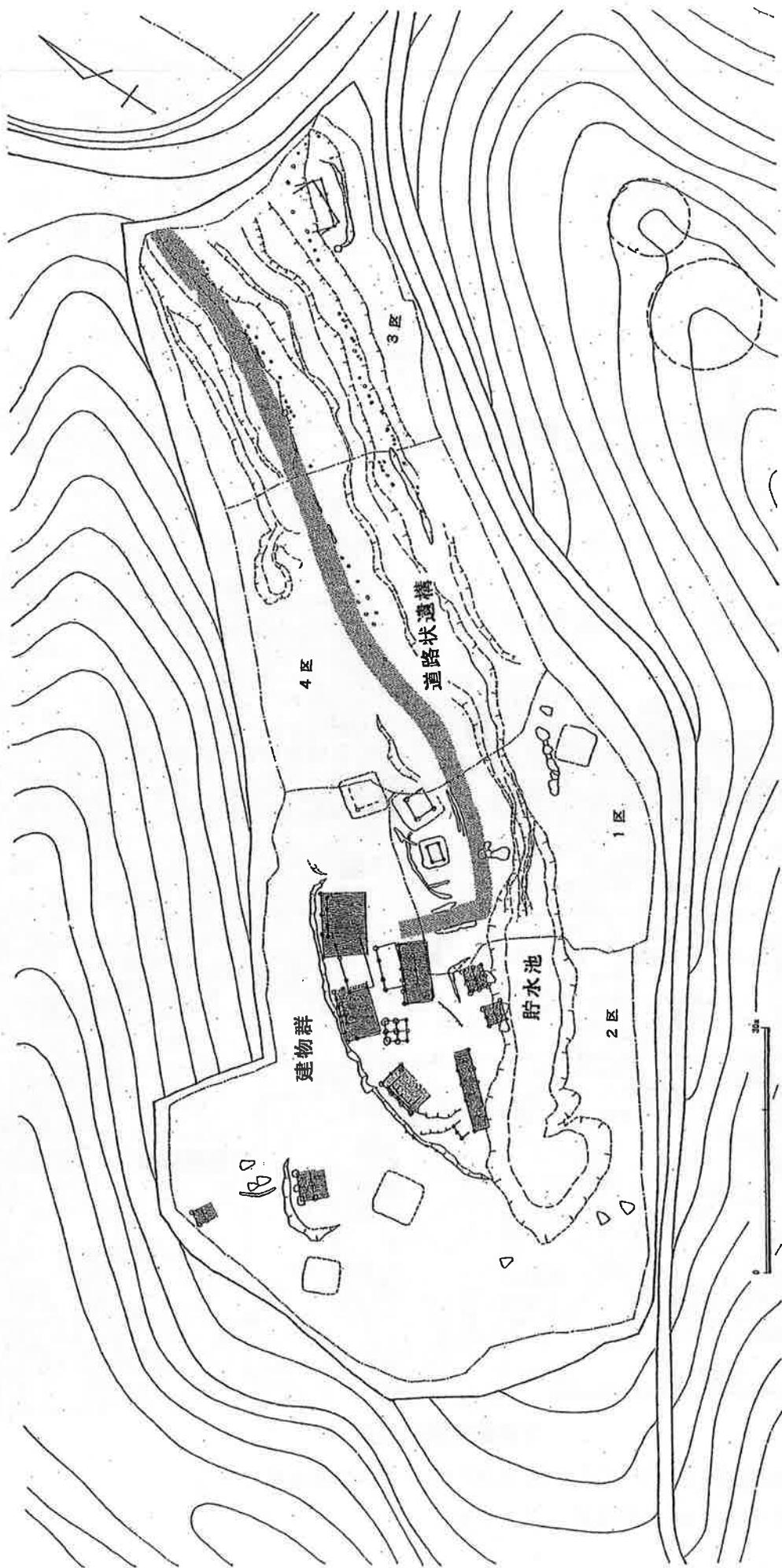
怡土城



牛頭窯跡群の位置

大野城市教育委員会, 2008『牛頭窯跡群一総括報告書』

『大野城市文化財調査報告書』第77集



元岡遺跡群 7次調査全体図

元岡遺跡出土木簡読解文

元岡1号木簡（長さ三十一・八cm、幅三cm、厚さり・五cm）

「壬辰年韓鐵□□」

元岡2号木簡（長さ五十一・cm以上、幅三・二cm、厚さり・四cm）

「郡カ」「五カ」

「ニカ」

「ニロロロ里長□□戸」「者大贊甘口斤」

「姪馬カ」

「瓦カ」

「□□□政丁□□ア□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□」

「□田 余戸人在

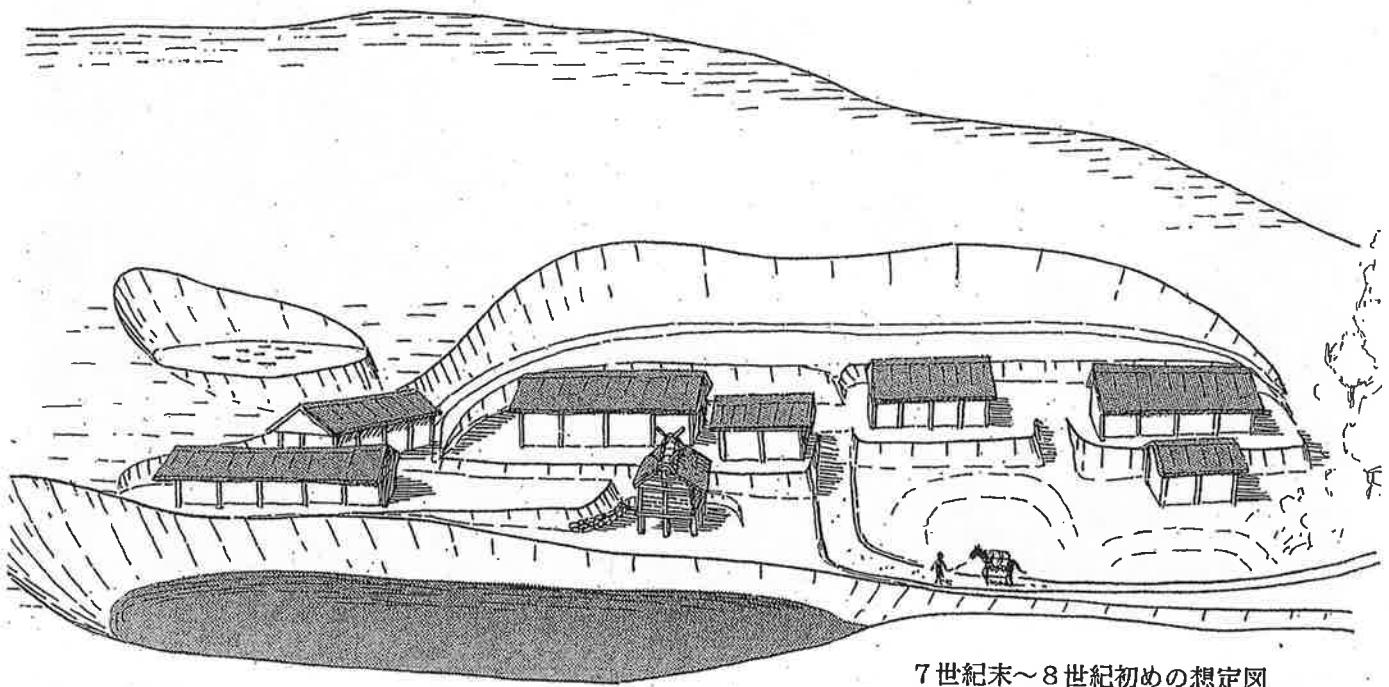
「□□□島里□□□□□□□□□□□□□□□□□□」

「□」

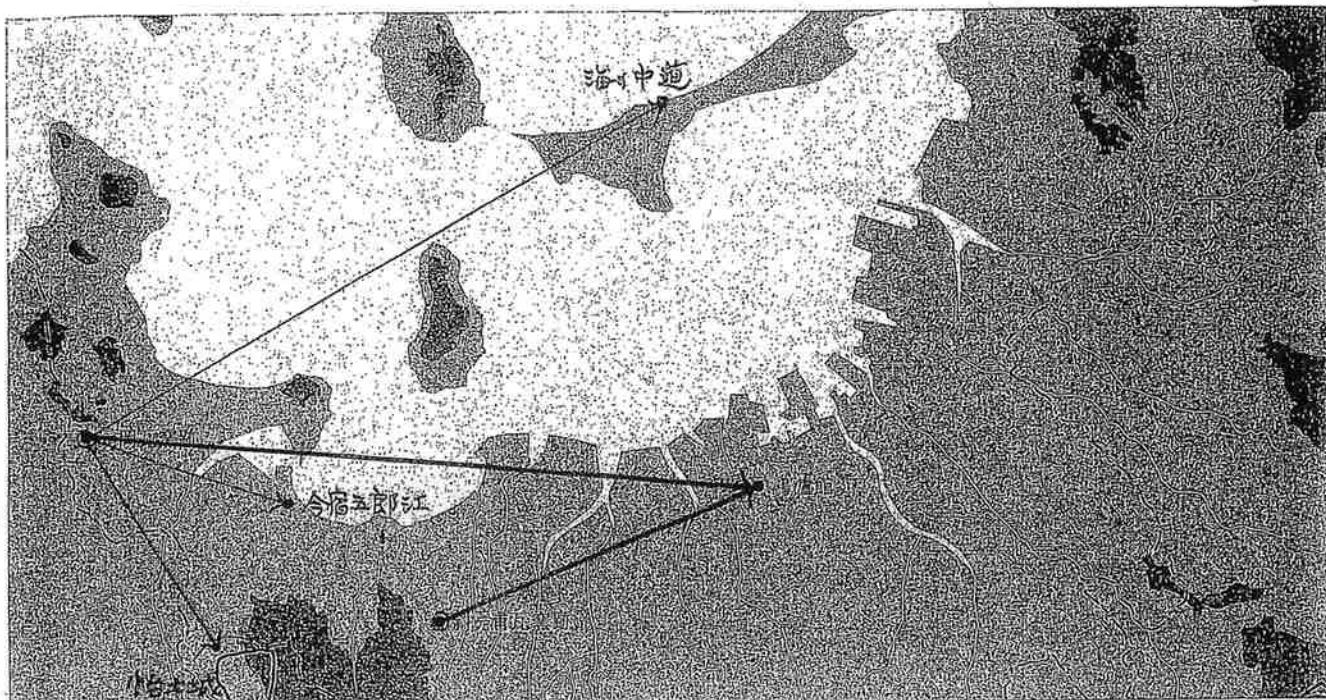
「□」

元岡3号木簡（長さ十一・cm、幅二・五cm）

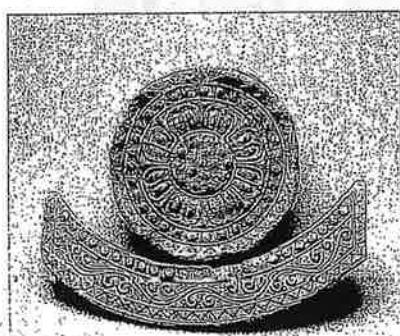
「△□□「」」△」



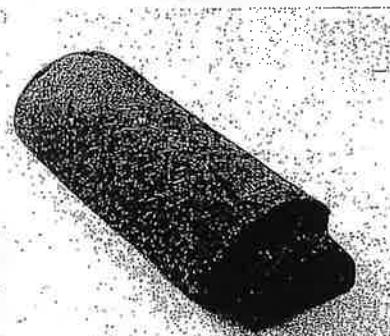
7世紀末～8世紀初めの想定図



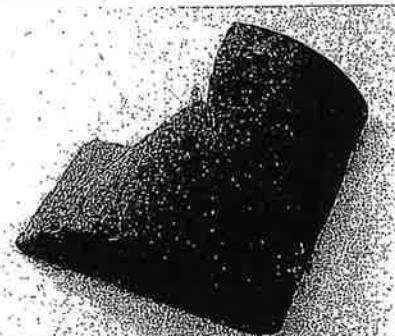
元岡瓦窯跡、斜ヶ浦瓦窯跡位置図



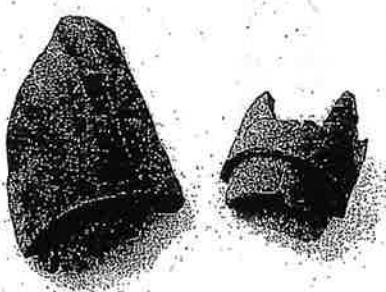
124



126



126



125

鴻臚館御用達の瓦

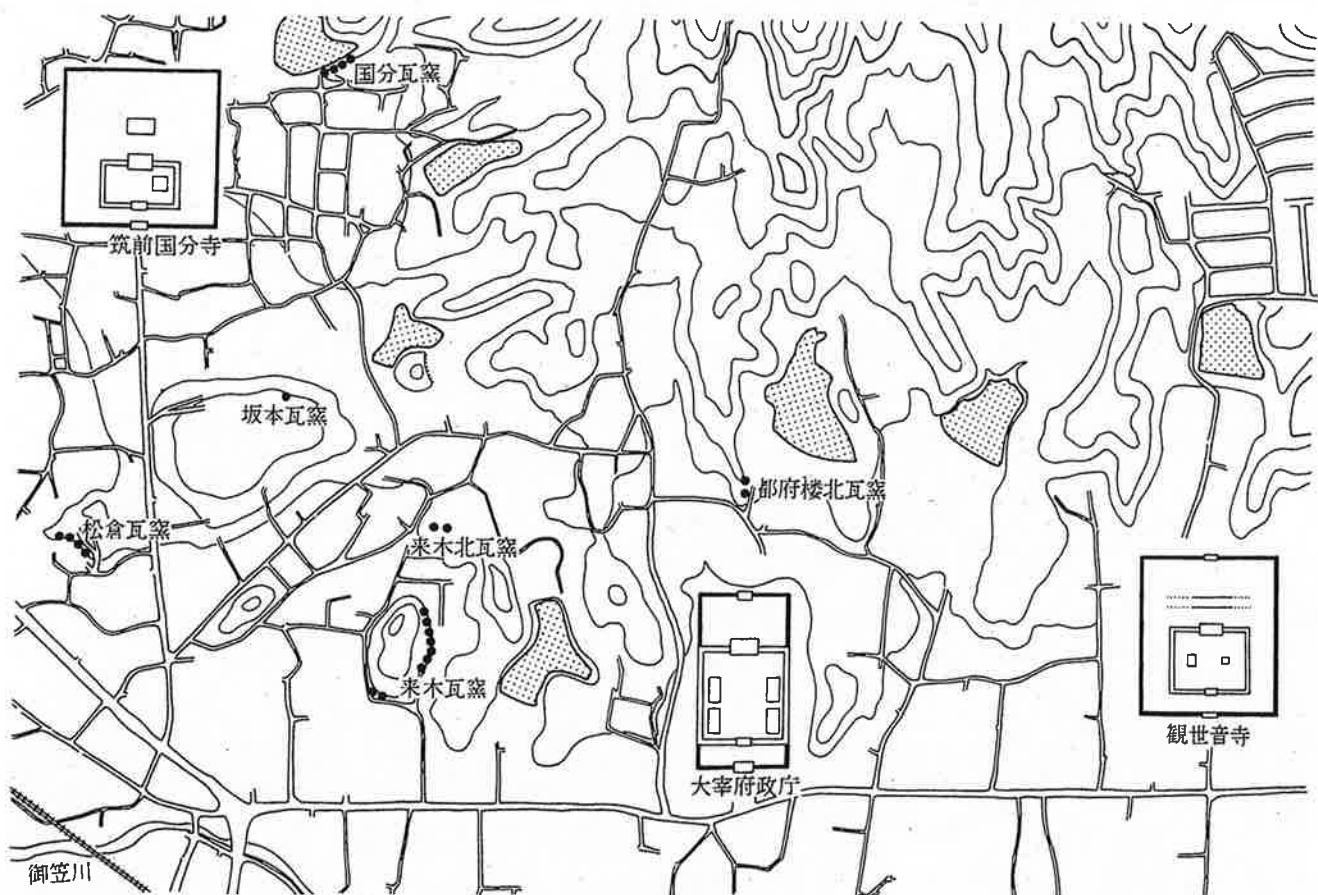
ななめがうら
斜ヶ浦瓦窯跡は福岡市西区生の松原に位置する瓦窯跡で、大正時代から「簪固」や「伊貴作」の銘が入った瓦が採集されており、鴻臚館に関連する瓦を製作した窯跡である可能性が指摘されている。近年の確認調査で、7基の窯跡と炉跡が検出され、出土した瓦には鴻臚館跡出土瓦のうち10世紀後半～12世紀前半のものと類似するものがある。元岡瓦窯跡は元岡・桑原遺跡群内で確認された瓦窯跡で、9世紀後半～10世紀前半を中心とする瓦が出土していて、出土した瓦のなかには鴻臚館や海の中道跡、今宿五郎江遺跡で出土した瓦に類似したものがみられ、当時の官営施設への瓦の供給源と考えられる。

124—老司系軒丸瓦・軒平瓦
福岡市南区老司瓦窯跡
125—平瓦・丸瓦／福岡市西区斜ヶ浦瓦窯
126—平瓦・丸瓦／福岡市西区元岡瓦窯跡
(元岡・桑原遺跡群)
元岡瓦窯からは、鴻臚館をはじめ、怡土城跡から出土する瓦と共に通するものが出土しており、怡土城にも瓦を供給したと考えられる。

瓦の供給

発掘調査によって最も多量に出土するのは瓦である。大宰府の中心であった政庁跡の建物はすべて瓦葺であり、建設に際して必要とされた屋根瓦は、万をもって数える膨大な量にのぼったであろう。さらに最初の建設だけでなく建て替えや殿舎の維持修理に要した瓦も、相当の量にのぼったと思われる。現在都府楼の西側、来木、松倉などの丘陵にこの瓦を焼いた瓦窯が点々と散在している。この瓦窯は、丘陵の斜面に沿って細長く斜めの穴をほりぬいた穴窯で、現在までのところ14基が確認されている。これらの瓦窯がどのようにして操業されていたかわからないが、平城宮の例によると6~10基の瓦窯が一時に操業し、一基の窯で一回に1000枚の瓦を焼くとして6000~10000枚が一工房の生産能力と推定されている。もちろん大宰府と平城宮と同列に論じるわけ

にはいかないが、いずれにしても大宰府においてかなり大規模に瓦を生産していたと推定される。また筑前国分寺、觀世音寺についても独自の瓦工房が設けられており、国分寺の東に2基の瓦窯が残っている。觀世音寺については瓦窯は現在のところわからないが、延喜5年の「觀世音寺資財帳」に造瓦屋と称する建物や瓦を作る際に使用する道具についての記載があり、瓦工房のあったことが知られる。



▲大宰府の瓦窯
九州歴史資料館、1978『變遷する朝廷』
大宰府展、図録

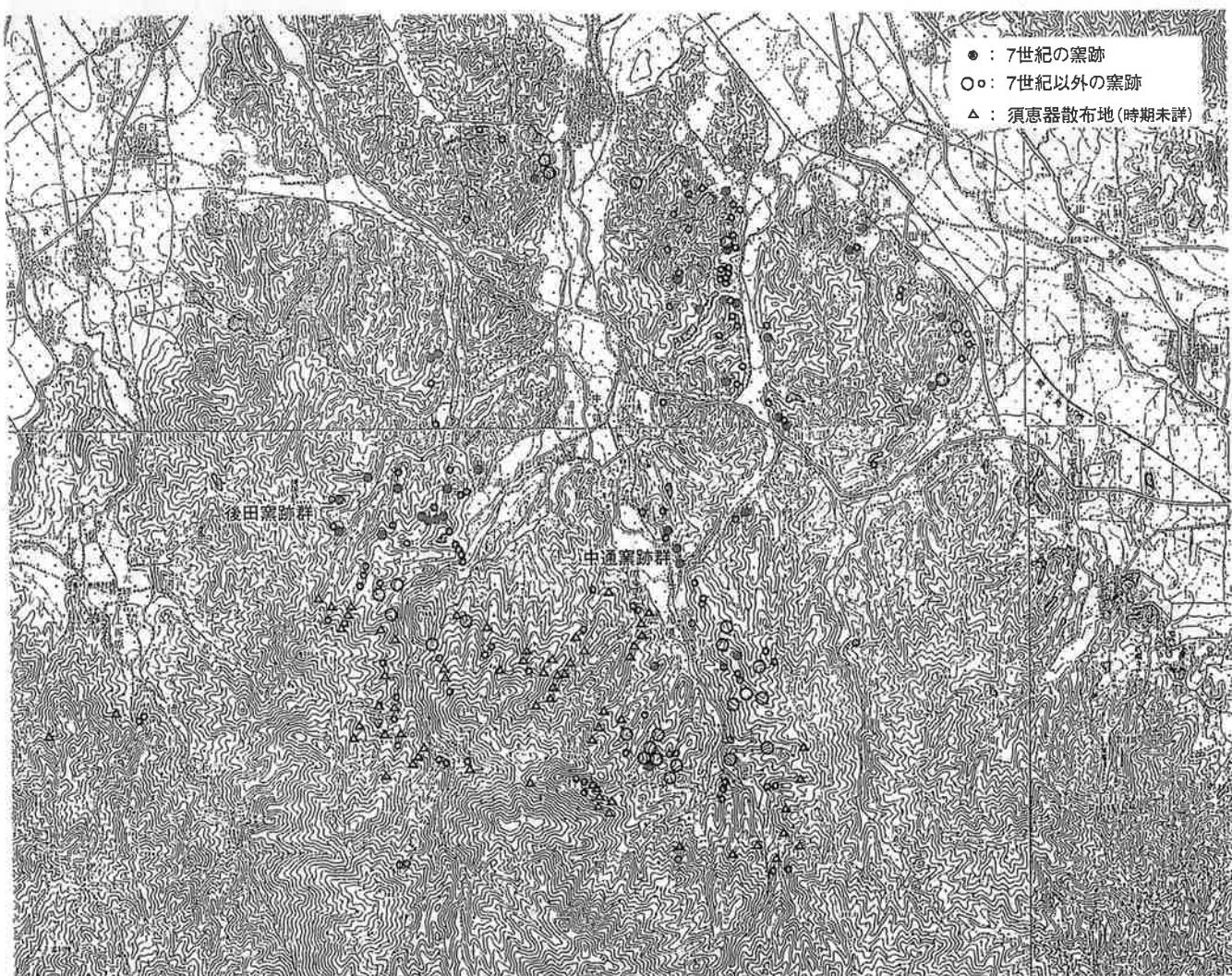
生産の拡大と転換（7世紀）

窯は全体で盛んに操業が行われている。特に7世紀前半代は窯の規模が最も大きくなる。中頃になると一時窯の数が減少するが、後半になると増加しており、次第に山の深いところに窯を造るようになる。

7世紀前半は、多孔式煙道窯で全長10mを超えるものが造られる。6世紀と同じくつまみがなく底が丸い蓋杯（杯H）のほか、椀・高杯・瓈などが焼かれる。陶棺が焼かれたのはこのころで、野添7次2号窯跡で生産が確認された。脚の多さが目を引くが、畿内系と考えられる技術が在地的な変容を遂げた結果と考えられる。一方、蓋杯でつまみの付いたもの（杯G）が生産されるようになる。

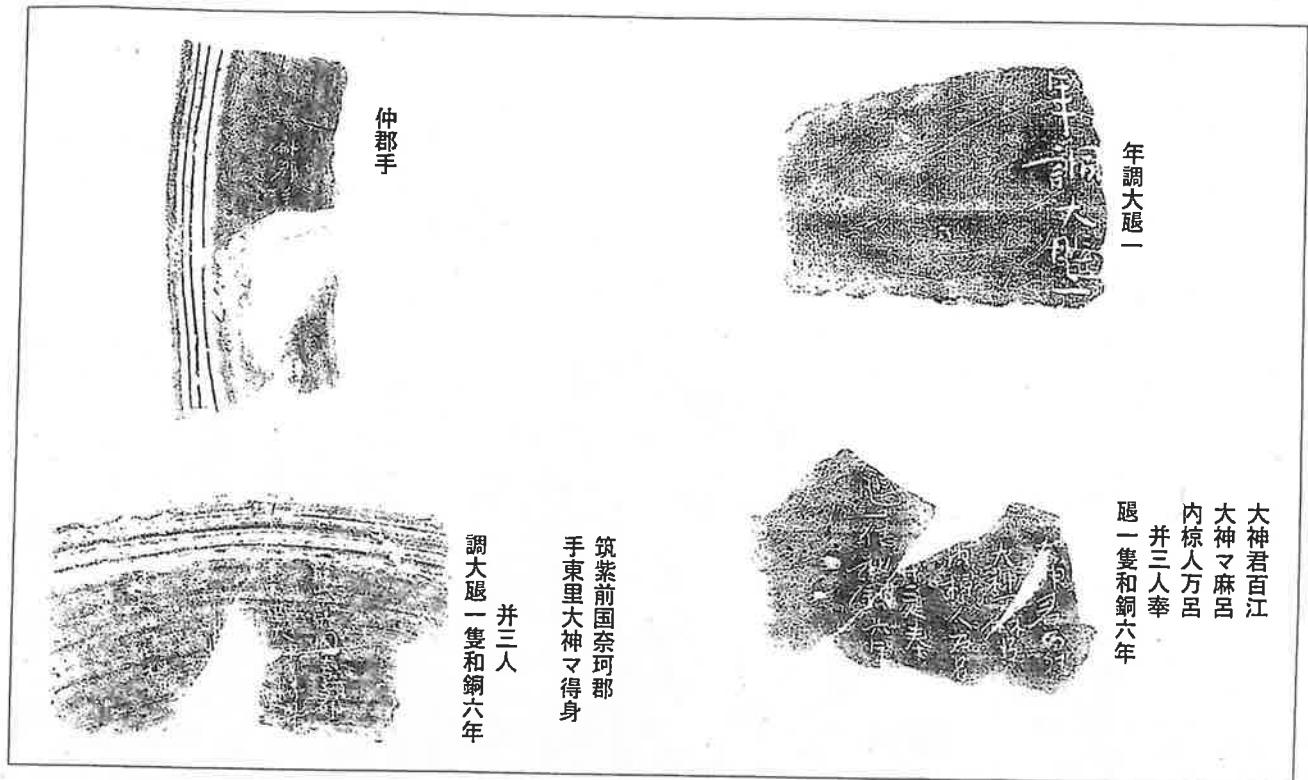
中頃になると、直立煙道窯が登場する。これは煙道が奥壁に接してほぼ直立するように立ち上がるものである。以後後半にかけて次第に直立煙道窯が主流となり、多孔式煙道窯は次第に少なくなる。また、全長10mを超えるような大形の窯は少なく窯の規模は小さくなり、後半になると全長5m以下の小形の窯跡が出現し、製品の焼き分けがおこなわれ始めた可能性がある。

後半になると、つまみ付きで高台付の蓋杯（杯B）が主流となり、高杯などの形態も変化している。この時期、筑前国内（現在の福岡県西北部）では牛頸窯のみで須恵器生産がおこなわれ、一国一窯体制がとられたようである。こうした新しい器種の出現と窯構造の変化・小形化・一国一窯体制への変化は期を一にするようにおこっており、牛頸須恵器窯跡の大きな転換点である。



7世紀の窯跡分布図

大野城市教育委員会, 2008『牛頸窯跡群一総括報告書』I 一『大野城市文化財調査報告書』第ワ7集



大野城市教育委員会、2008『牛頸ハセムシ窯跡群』1、大野城市歴史資料展示室 解説シート 参考No.9



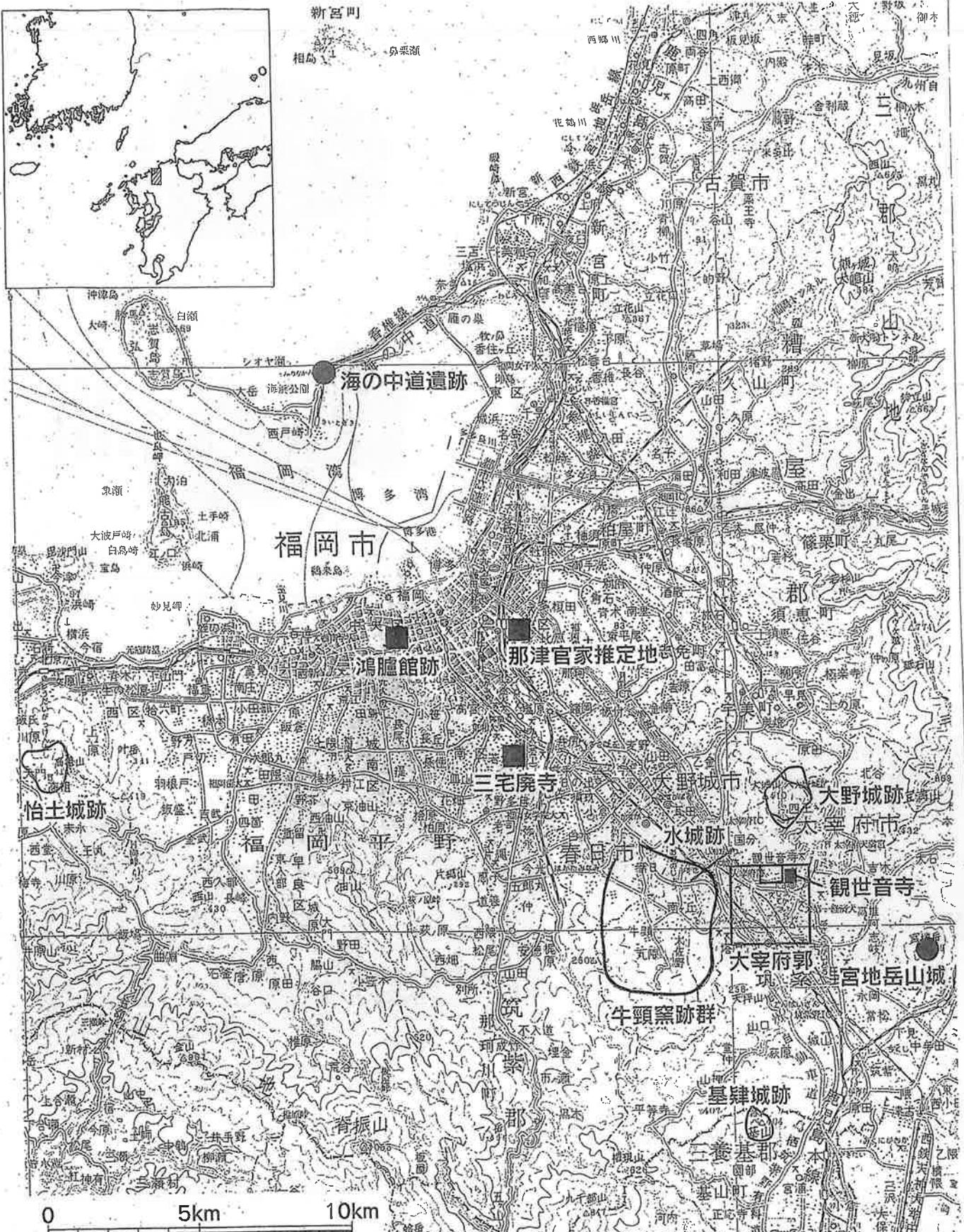
「大神部見乃官」ヘラ書き須恵器（本堂遺跡群7次調査出土）

九州国立博物館、2009

『国指定史跡 牛頸須恵器窯跡とその世界』九州国立博物館文化交流展トピック展示（四録）



「和銅六年」銘ヘラ書き須恵器（ハセムシ窯跡群12地区出土）



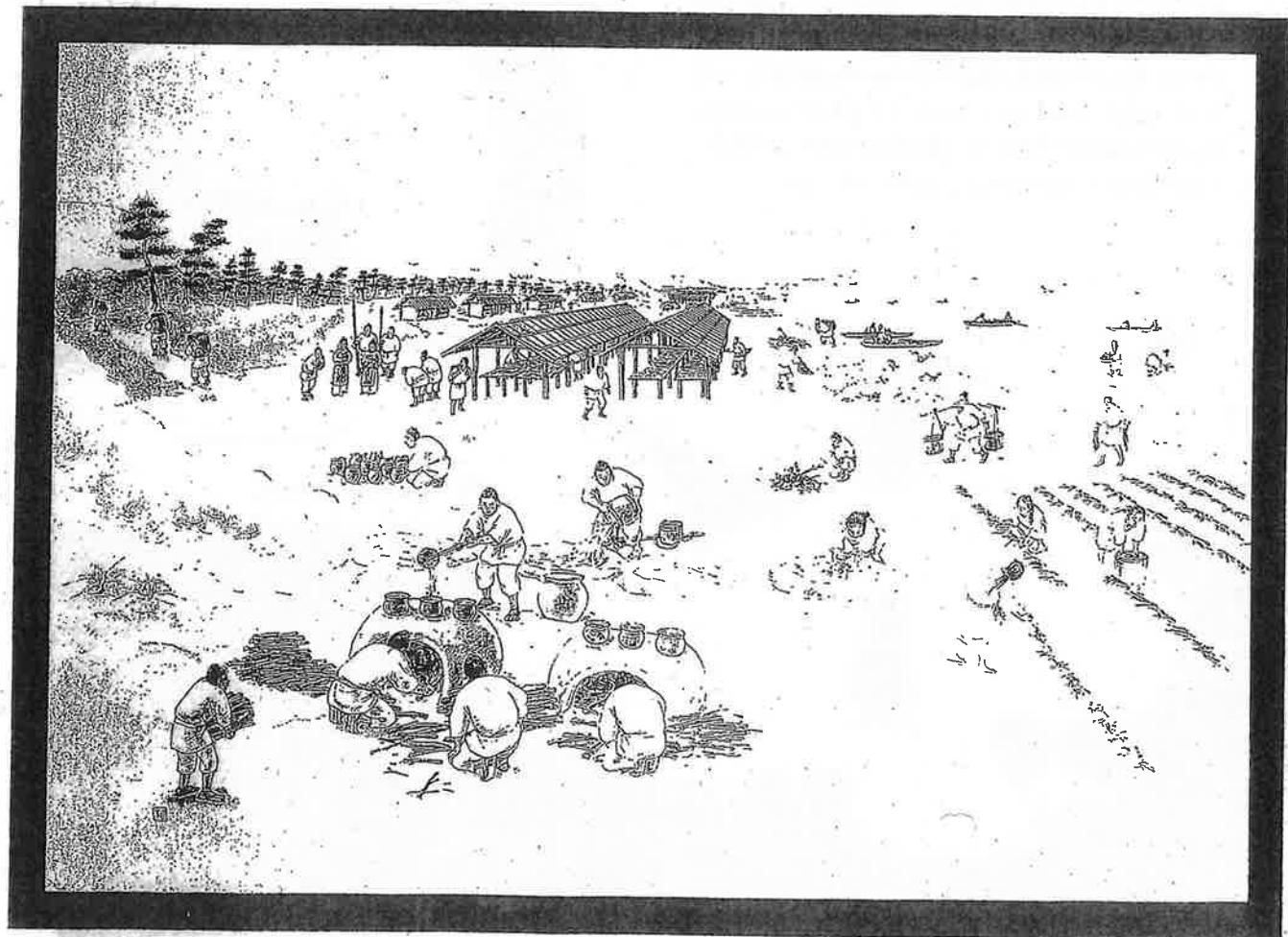
牛頸窯跡群の位置

大野城市教育委員会、2008『牛頸窯跡群一覧化報告書』

『大野城市文化財調査報告書』第77集

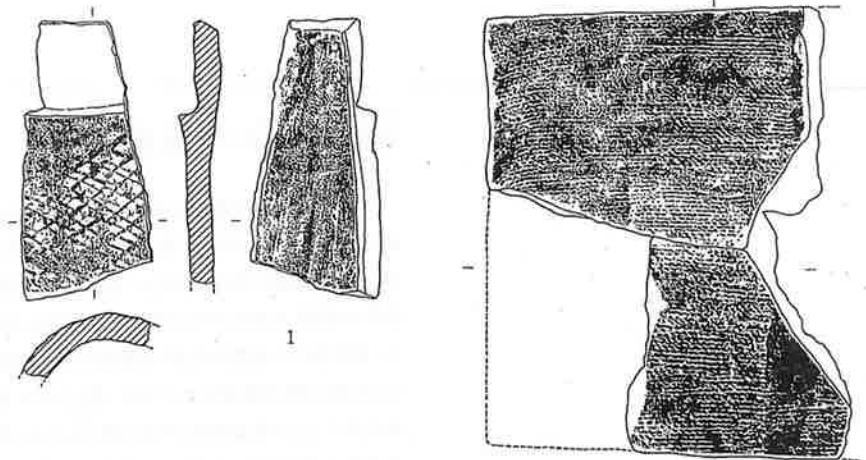
つのみくりや
津厨一海の中道遺跡

博多湾の北側を囲むように、志賀島に向かって砂嘴が細長く伸びている。この砂州が「海の中道」で、海の中道遺跡はこの砂州の玄界灘側に長さ約400m、幅50mの範囲で広がっている。調査の結果、8世紀から10世紀にかけての遺構・遺物が出土した。検出された遺構は住居・建物跡の他、製塩作業を行ったとみられる焼土層が確認されており、焼土中の貝殻などから万葉集に出てくる「藻塩焼き」の跡と考えられる。出土遺物には漁労具が多く、釣り針やおもりなど漁村集落遺跡に特有な遺物がみられる。その一方で、銅鏡や巡方、貨幣など通常の漁村では考えられない遺物が出土しており、何らかの公的な機関がこの漁村を統括していた可能性が高い。研究者の中には、この集落を鴻臚館や大宰府に食料を供給した「津厨」に比定する向きもある。



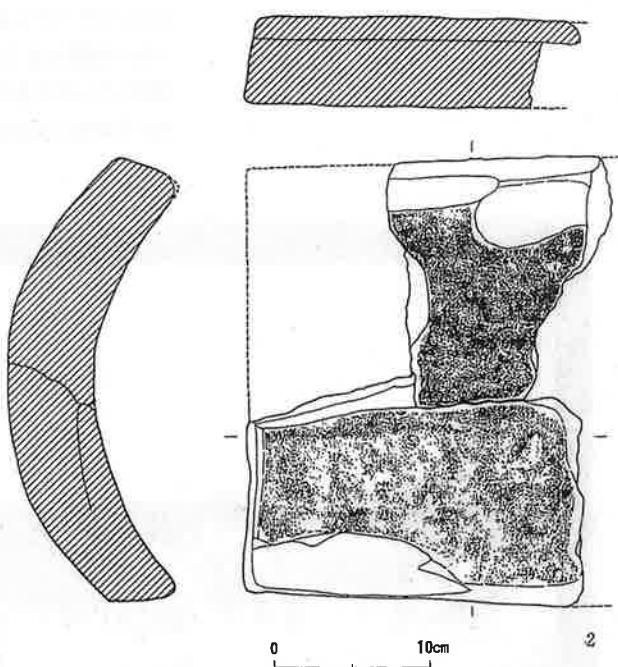
海の中道での藻塩焼きの風景(早川和子 画)

手前では藻を干し、塩を焼いている。奥の方では太宰府や鴻臚館に持つて行く魚の干物を作っているのだろうか。官営の施設なので、管理する役人の姿もみられる。

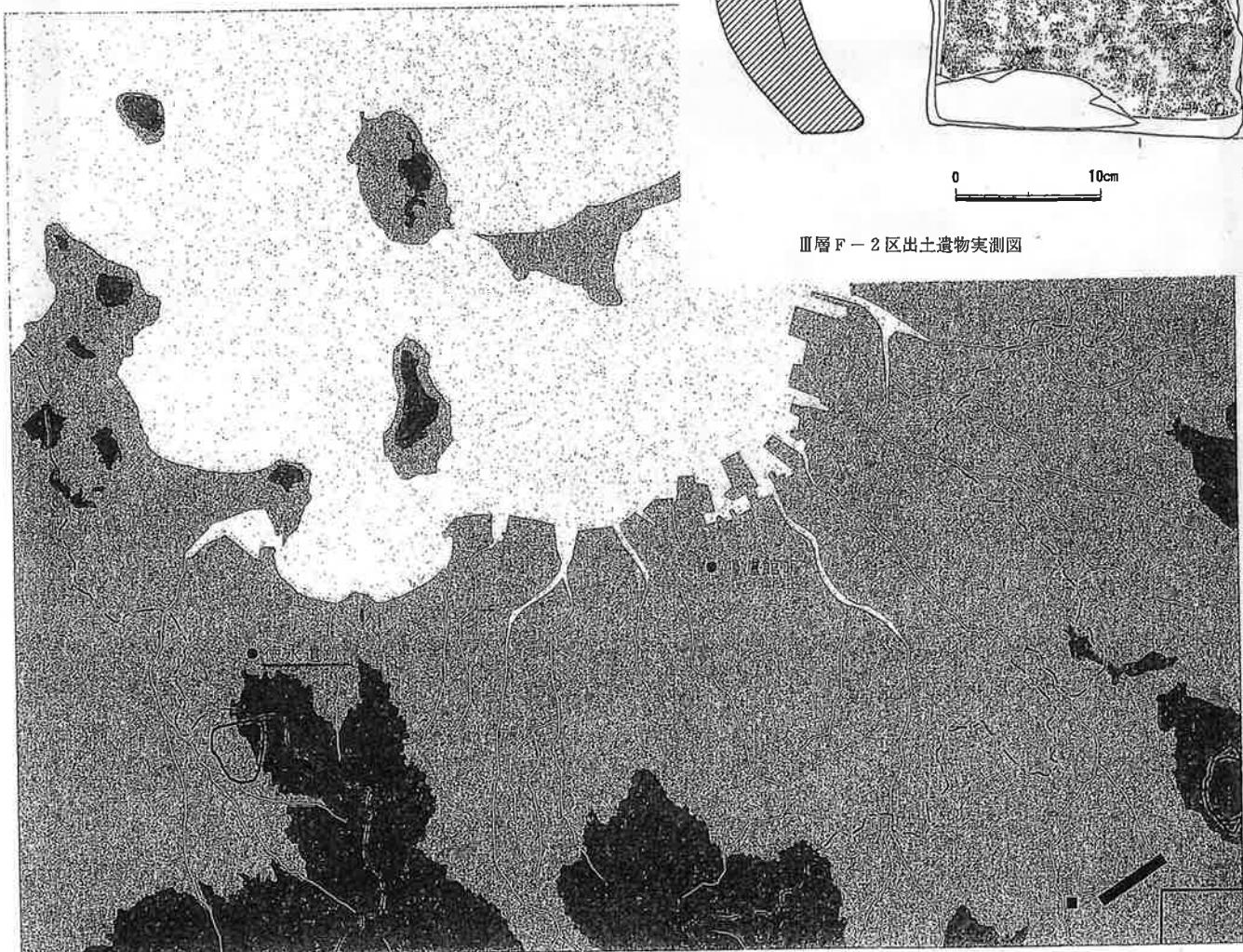


主船司—徳永遺跡

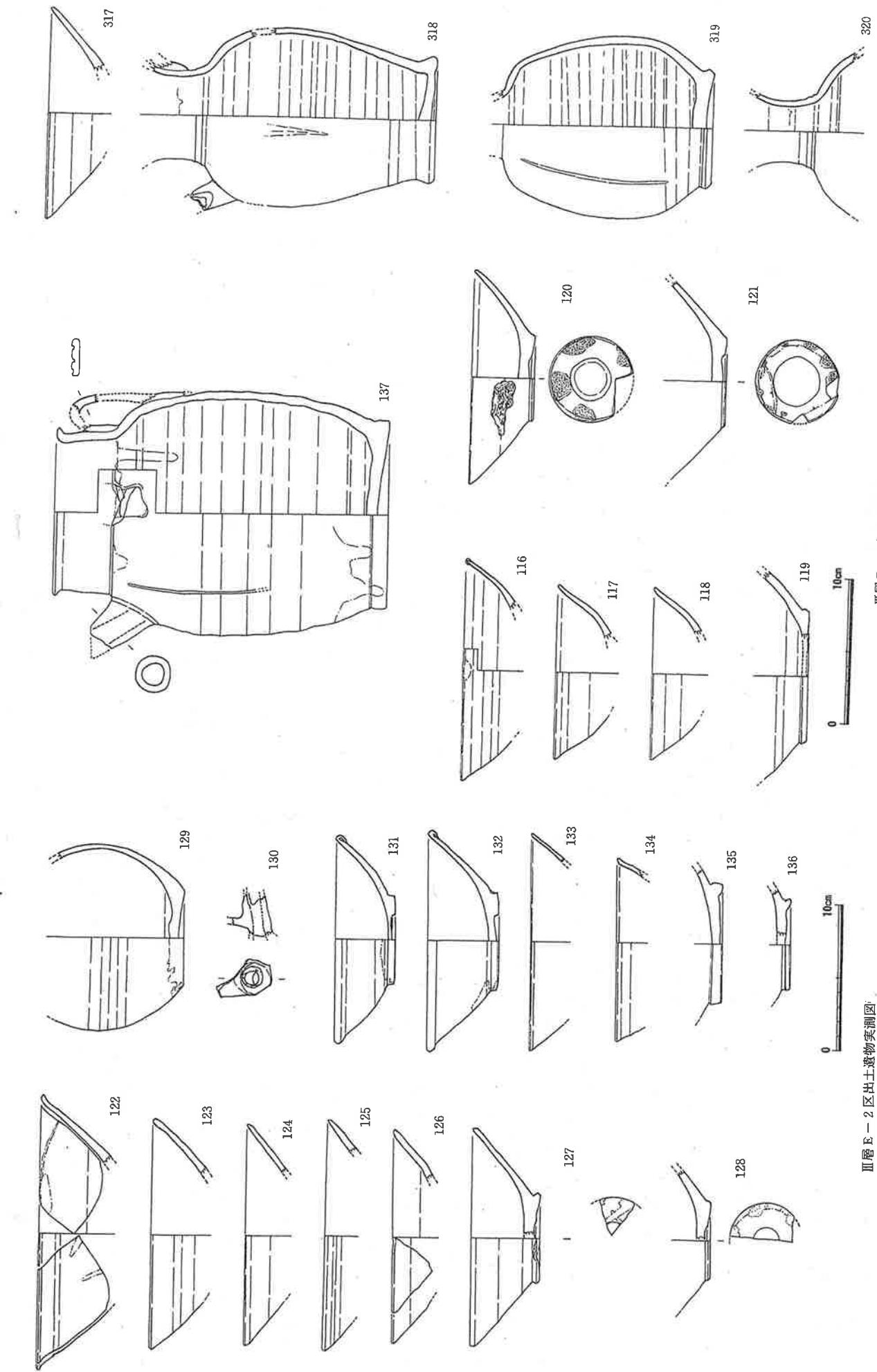
「主船司」
「主船司」は律令制度の下で公私船舶の修理・管理のために置かれていた官司で、摂津（現在の大坂府付近）と大宰府に設置されていた。大宰府に置かれていた主船司は船舶の修理や大宰府に出入りする船舶の管理、また不慮の侵攻に備えていたが、9世紀後半には廃れたとみられる。徳永遺跡からは9世紀中頃から後半の遺物が多数出土し、遺跡西側に位置する「周船寺」の地名と併せて、主船司に関連する遺跡と考えられる。



III層F-2区出土遺物実測図



徳永遺跡位置図



III层E-2区出土遗物实测图
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第242集
福岡市教育委員会、1991年 德永 遼助、

